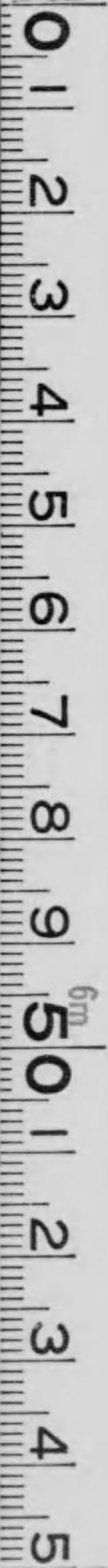


192
H31



始



1-31707

お

~~372119~~

192
H31



原
坦
嶺
著

基督
と
宗
吾

會合
社名
弘道館發兌



序

人は先づ何を措いても己自らを知ることを要する。國民として亦然り、徒らに外國の表面に幻惑せられて我本領を失ふべきでない、自己國民生活の根本を通じて人類生活の第一義を自覺すべきものである。彼の基督の教へが歐米先進國に行はるるの故を以て、我國民も亦直に之に歸依せざるべからずと爲すが如きは、短見、早計も亦甚だしいものと言はねばならぬ。

古代猶太民族は自らエホバの選民を以て任じ、信仰なき他の諸民族の中心となつて模範を示さんとするの抱負と意氣込とを有つて居た。否、現存の猶太民族も此理想を有つて居ること

は疑問の餘地がない。併しながら其永久に亡國民たる運命を擔つて今日に至れる所以の奈邊に存するかを考察する時、彼等の理想の半面には、實に忌むべき缺陷を具へて居ることを知るに難くはない。彼等の缺陷は排他的專制的、破壊的の惡魔たる點にある。彼等は自己種類の私を念頭に置くを專にし、目的の爲めには手段を選ばず、權力強制の暴力に更ふるに金力專制の暴力を以てせんとすることは、歐米到る所に其例を見る所である。近時彼等の破壊力の代表と見るべきものにマルクスとレニンとがある。マルクスの所説が社會主義者に金科玉條と重んぜらるゝとも、其財力のみを偏重して階級闘争を主眼とするが如き、亦猶太的破壊思想の發現に他ならない。露西亞の過激

派首領たるレニンも亦猶太系の人物、其爲す所の如何に殘虐横暴なるかは、嗚々を要せざる所である。古代に於ける基督の精神亦其時代に對する叛逆思想に他ならないものであつて、偶々愛を云爲するが如きは、其徒を聚めんとするの方便に過ぎなかつたと見るに難くない。

歐米に於ける基督教は著しく道德化されたものである。併しながら基督の根本精神に遡る時、其所に破壊的叛逆思想の大なるものあるを認めずには居られない。此根本精神に觸れた基督教徒が國家に對し、如何なる態度を持するに至るべきかは、敢て説明を要する所でない。近時我國の論壇に於て、國家を無視し、秩序を破壊せんとするが如き危険の論議を發表して憚

らざる人士の基督教徒に存することは最も注目すべき點である。

我等の有する、否、矜りとすべき古事記、日本書紀の如きは顧みんともせず、猶太人の舊記たる創世記に熱誠なる信仰を捧ぐるは、賢明なる日本民族の爲すべき所なるか。將又我等の歴史、思想は無價値にして、猶太民族の歴史、思想のみ單り價値ありとするか。歐米に學ぶは可なるも、之に心酔し之に感溺するは自己を亡ぼすものである。予は切に日本民族の自覺を希望して止まない。

基督が十字架上に濺いだ犠牲の血が基督教の淵源であると聞く時、我宗吾が同じく十字架上に濺いだ犠牲の血は、日本民

族に對して何を教へるか。予は漫に世界的大宗教の教祖たる基督を誹謗せんとするのではない。偶々最期の十字架を同ふせる兩者を捉へ來つて、彼是精神の比較を試みたものである。此書は數年前の舊稿に屬し、今や上梓に方り改訂を加ふべき點尠からざるに拘らず之を果さずして刊行するに至れるを遺憾とするものであるが、全篇を一貫する主意に至つては渝る所がない、幸ひに徹裏を了解せらるゝあらば望みは足るのである。

於雜司谷僑居

著者 識

大正九年初夏

興の英主……虚偽の系圖……猶太王ならんとする道具……平凡なる人の子……神の不用意

三、茫邈烟の如き大教祖の生涯……………三七

福音書は基督教唯一の典據……無智の神童……娼家に入らせる遊治郎……三十年茫邈烟の如し……パブテスマと斷食……三年の説教……刑死

四、木内宗五郎の家系……………四二

羅馬書の妄言……千葉氏の家臣……北條氏滅ぶ……印幡沼開墾と土着……宗吾の後……宗吾傳の異説……松虫姫……講談の誤傳

五、義人の生涯……………四八

全能なる神の子と片田舎の百姓……平凡なる生立……堀田正盛の榮達……正盛の殉死……正信の相續と苛斂誅求……陰雲地を蔽ふ……宗吾の崛起……周到なる注意……久世大和守へ罵詈……最後の覺悟

生別難苦……船夫快く死す……感化力の相異……將軍へ直訴……至誠にして通せざるなし

第二章 二者の救世事業

一、使徒を去りて耶蘇を見よ……………六二

基督教傳播は使徒の力也……献身的布教は耶蘇の力に非ず……マホメットの雄略……劍端天國あり……邪教も時を得れば大勢力を得……耶蘇は種……種のない地とある地……種の價値は利用者に依て決す

二、耶蘇は何者を救ひしや……………六九

園藝家の品種改良……疑ふべき人類濟度……巧妙なる奇術……萬能家の例外……悪むべき殘忍性……虚偽の救世

三、宗吾の救濟思想……………九六

不言實行……三百八十九ヶ村小區域と云ふ勿れ……冥加金……奸計

圖に中る……苛酷嚴峻を極めたる貢租……悲景慘狀言ふべからず
立憲治下の救済機關……愛他精神の極致

四、宗吾の救世は現實にして且永遠の生命あり……………一〇六

偽善と眞善……偉大なる救世的精神……一言半句の申開なし……貢
租忽ち舊に復す……處刑評議……女子に男名を付す……父子死刑

第三章 十字架上の兩者

一、反逆者として刑せられたる耶蘇……………一三三

救の聲は微妙に響く……新王國の建設は近きにあり……價値なき
人格……高尚なる祭司長……至る所に惡まれたる神の子……巧妙な
る遁辭……耶蘇よりも殺人の強盜が善い……棘の王冠……耶蘇は國
權を認めず……叛逆者に非ずして何ぞ

二、群衆嘲罵の裡に死したる耶蘇……………一三三

輪越節の犠牲……ゴルゴダの丘……人の死なんとする其言や善し

……弟子の従ふもの僅かに一人……太陽光を失ふ……神よ捨て給
ふか……一切の虚偽を一言に自白す

三、從容磔に就ける義人宗吾……………一三〇

助命の歎願……處刑期日を繰上ぐ……義人の子は孝也……正邪神明
の知るあり……從容十八鎗を受く……永遠の生命茲に發して萬世
に輝く

四、三百八十九ヶ村の民衆一人の泣かざるなし……………一三六

三百八十九ヶ村の老若男女雲の如く集ふ……泣かざるもの宗吾
と奸吏のみ……耶蘇の悲痛と孰れ

五、エルサレムの昇天と東勝寺の墳墓……………一三六

地震ひ岩裂け墓開く……死者墳墓より出で去る……弟子の目前に
昇天す……何故に墓開けたるか……人の子の肉は土に歸したり……
靈に於て永遠に生きよ

第四章 教義と示現

一、基督教の母教……………一四四

舊約全書は天啓靈示の神書……モーセの律法は神命の規矩……疑はしき内所證の實驗……紛々たる諸説……一珍説

二、基督教の要義……………一四九

組成せる教理なし……愛は其第一義……主の祈禱……耶蘇が人世に持ち來れる最大の幸福

三、愛は基督教の特有に非らず……………一五一

善美なる基督教の綱領……教祖言行の矛盾を奈何……耶蘇の愛は無價値

四、宗吾の愛の發現……………一五四

領民救助は宗吾の愛の一端のみ……無限の愛は其元氣生命……至言と徳行とは燦として輝く……我國民の幸福は耶蘇と没交渉……

我田引水の妄説

五、耶蘇の神人交感と宗吾の人間力……………一五九

全智全能の神……常人よりも下劣なる人格……斷食場裡打出の産物……大人格の裡自ら神人交感あり……宗吾靈神……堀田家の没落

第五章 性格と道徳

一、二者の性格……………一六六

古往今來唯一の人格者……唾棄すべき下劣人物……糞土に被せし燦然なる法衣……正義と愛との結晶……純正無垢なる清淨心より發する人格の光

二、二者所望の最大幸福……………一七〇

我曹の主は生ける也……矛盾せる奇現象……生死を超越せる大安心……最後の哀音は野心に發す……現世的と超世的

三、基督教と道徳……………一七三

歐米道徳の本源……幾つもある眞理……基督教國に滅亡なきや……
暴露されたる基督教國の腐敗……罪惡觀……反省を知らざる神の
子……報酬を望む徳行……彼等の倨傲は耶蘇の教ふる所也

四、宗吾の言行と我國民道徳……………一八三

我國民道徳は大和魂に發す……大和魂は靈の精華也……絶對の和
無限の愛……清廉潔白忠勇義烈高雅優美……正氣歌……犠牲的精神
……結核菌を飲む遠視的近視眼者……純潔純粹……將來の世界指導
者……永遠の程

第六章 國粹と基督教

一、神の意義……………一九七

神は大和魂の本源たる御靈也……天地萬物創造の神……平田篤胤
の古道人意……地神五代……天照大御神の御神徳……三種の神器と

絶對無限の靈徳……古來不言實行の國……皇國人種の祖先……エホ
ベの天地萬物創造……ノアの洪水……ゴツトと神

二、我國體と基督教……………二二七

沙上の樓閣は忽ち崩る……萬邦無比の我國體……血族團結は最も
自然也……筑紫日向宮……不世出の英主……日本民族……祖先崇拜の
美風……基督教は我國體と相容れず……難祭とクリスマス

結 論……………二四二

耶蘇と宗吾との優劣……遠視的近視眼……共鳴と風馬牛……個人主
義……眞の自覺と眞の自我

基督と宗吾目次終

基督教の宗

基督教の宗

一、基督教の宗

二、基督教の宗

三、基督教の宗

四、基督教の宗

五、基督教の宗

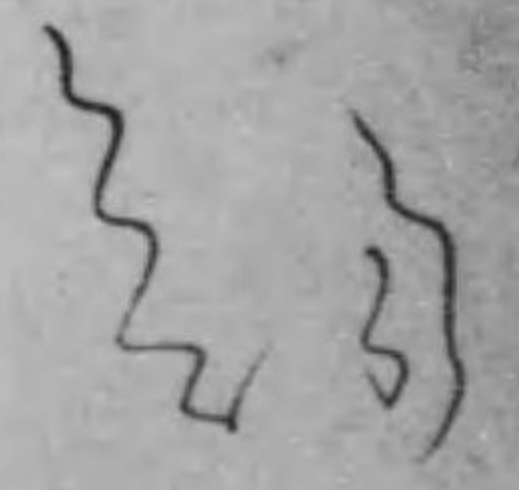
六、基督教の宗

七、基督教の宗

八、基督教の宗

九、基督教の宗

十、基督教の宗



基督教と宗吾

原坦嶺著



緒言

ナザレの聖者と佐倉の義民……赤裸々の兩者……
 所謂神の力と人の力……基督教の傳播は歐羅巴の
 國狀による……羅馬の大勢力……新約全書の編成
 ……何れに學ぶべき乎

基督教と宗吾

緒言

世界的な宗教の教祖たるナザレの聖者と佐倉の一義民たる
 に過ぎざる宗吾とを比較するといふ事は甚だしい不倫の事た
 るが如く感ぜられるかも知れない。併しながら等しく義の爲

め愛の爲めに十字架上に悲壯の最期を遂げたる兩者の人格を
 赤裸々に比較することは頗る興味ある問題ではなからうかと
 思はれるのである。吾人の見る所を以てすれば、一藩領民を虐
 政の裡に救ひ之に福祉と慰安とを與へんが爲め威武に屈せず、
 死を期して奮つて難局に當り甘んじて磔刑を受けて大犠牲的
 精神を發揮せる宗吾の生涯は、唯單に幾多の奇蹟と、十字架上に
 所謂至上の愛を示したと傳へられるのみなる耶蘇に比しては
 毫も遜色を發見し能はざるのみならず所謂神の啓示を藉るこ
 となく人間として飽迄人間美を發揮したる點に於て寧ろ宗吾
 の人格の方が遙に立派なものではあるまいかと思はれるので
 ある。重ねて言ふが兩者の十字架上に悲壯なる最期を遂げる

に至つた道程を見るに、耶蘇が所謂神の命に従ひ神の愛を宣傳
 した結果たるに對し、宗吾は徹頭徹尾自己の自由意志を以て佐
 倉領民の犠牲となり、愛他精神の極致を發揮したる結果である。
 即ち自己の良心に絶對的に服従して人格の尊嚴を遺憾なく示
 したものである。譬へて見れば、耶蘇は神格を表はし、宗吾は人
 格を表はしたものと云ふことが出来る。此點に於て吾人地上
 に生存する人間は所謂神の子たる耶蘇よりも、人の子たる宗吾
 に學ぶ所多くあらねばならぬことを感ずるのである。
 元來耶蘇は二千年に垂んとする昔遠い異域の猶太に生れた
 と傳へられる人であつて、其出世の如きも極めて荒誕無稽の説
 を以て傳へられ、少年時代の經歷の如き逸として知ることが出

結 言
 来ない、唯三年の説教と十字架上の最期とが傳へられて居るのみである。然るに我同胞中には、斯様に遠い昔の猶太人の神秘的なる傳説を信じ、且之を崇拜する者の多いにも拘らず、我國に於ける近代の事實たる大義人を顧みる者の甚だ尠ないのは何故であらうか。吾人は此遠視的近眼者流の多いのに痛歎を禁じ得ないのである。論者或は耶蘇は世界を支配すべき大宗教の教祖たるに對し、宗吾に至つては僅かに一藩領民の犠牲となりしに過ぎず、何等宗教的價値なきものなるが故に、其間自ら多大の懸隔あり、日を同じふして語るべきものに非ずと言ふであらう。併しながら之は大なる謬見たることは勿論である。何故かといふに、基督教の核子ともいふべきは愛であるが、宗吾の

結 言
 愛の精神と其實現とは決して耶蘇の示した愛なるものに劣つて居るとは見られないからである。唯宗吾の事跡の甚だ新しいのに對し、基督教は既に二千年に垂んとする悠久なる歴史を有つて居り、其間に大に發達して來たといふ利益の點が今日の懸隔を生せしめたのであつて、單に此懸隔を以て兩者の優劣を決せんとするが如きは謬れるの甚だしいものと言はねばならぬ。乃ち兩者を比較するには其根元に遡つて赤裸々の兩者を見なければならぬのである。今の基督教は甚だ盛んなものであるが、耶蘇自身が所謂神の愛なるものを傳へた地域は頗る狭小なる範圍を出ることが出来なかつたと思はれる。夫れは交通不便の未開時代に於ける僅に三年に止まるのであるか

緒言

ら如何に火の如き勢で傳播されたにもせよ、或一小地域を越えることの出来なかつたのは想像に難からざる所である。既に地域は狭小であるせめては其所説に權威があり偉大なる同化力があつたであらうか。否々其所説も所謂神の愛なるものが真に遺憾なく流露されたものではなかつたらしい。古語にも至誠にして通ぜざるなしと言はれてある通り、若し耶蘇の説く所が真に神の愛であり、至上圓滿なものであつたならば、猶太人も羅馬人も共に悉く其恩恵に浴し、其所説を信じて之を崇敬し、決して十字架上の惨刑に處するが如き筈はなかつたのである。況んや其門弟子から離反者、密告者を出すが如きをやである。斯く觀じ來ると、耶蘇の説いた所のものは左程に強い力

緒言

を有つたものでもなく、又布教の範圍も狭小であつて、宗教としては、耶蘇の生地たる猶太の一部分の人心を支配する程の價値さへもなかつたのは、勿論其門弟をすら充分に信服せしむる事が出来なかつたのである。之に比すると、宗吾は佐倉領民の犠牲となり、強烈なる愛の力を現實に發揮し、時の法によつて刑せられたとはいへ、其所期は遺憾なく貫徹して、一藩領民を救つたのみならず、其偉大なる犠牲的精神は、炳乎として後世に輝いて居るのであつて、所謂耶蘇の愛以上に強いものではなかつらうかと感ぜられる點が多いのである。併し耶蘇の愛は廣大無邊であるが故に、今日の如く世界の大宗教となり、二千年の久しい間、人生の歸趣を示して、人間に福祉を與へて來たのであるとい

ふ論者もあらうが之は前にも述べた時間の關係と歐羅巴諸國の國狀とが然らしめたのであつて必ずしも耶蘇の愛が宗吾の愛に勝つて居る結果だとは斷定出来ないのである。

先づ時間の點から見ると、耶蘇の説教は僅か三年に止まつて、さして効果もなかつたのみか、却つて世の反感を買ひ、十字架の上の露と消へる始末になつたのであつて、若し其後を繼ぐものが無かつたならば、其教は絶滅したであらうが、三年の説教の間に多少なりとも弟子の出來たのが幸であつた。そして其死後所謂使徒と稱せられる人々によつて其教を弘められたものであるから、其正所依の經典たる新約全書の如きも、耶蘇の歿後久しきを経て作られたものである。故に或人の如きは、基督敎を以

て耶蘇の教に非ずして保羅敎であるときへ言ふのもあるが、其等の議論は別問題として、基督敎學者の説によると、耶蘇死後三十年の間、其言行は單に記憶によつて信徒の間に傳はつたものであるが、斯くては甚だ不便だから、使徒保羅が先づ宗教的消息を草して之を諸所の教會に送り、又マタイは耶蘇の家語を集録してロギヤ(法語)と名付けた。之は實に紀元六十乃至七十年の事である。次で他の筆者は耶蘇の行事に關して信徒間に傳はる口碑を記し、一つの新書を作り、マタイの名を以て公刊した。之が即ち馬太傳である。其後使徒ペテロの友人馬可保羅の同僚たるルカが各福音書を著はした。之で新約全書の最初の三卷は出來上つたのであるが、其第四卷即ちヨハネの福音書に關し

ては第三世紀の作であるとも言ひ、又第二世紀の作であるとも
 言ふて學者間の考證も未だ一定して居ないとの事である。斯
 様に新約全書は多大の歲月を経て完成したものであつて、此久
 しい年月の間に口碑傳説が必ず正確に傳へられたか否かは甚
 だ疑問であると言はねばならぬ。若しまた一點の誤りもなく
 傳へられたものであるとするならば、其荒誕奇怪なる事跡を如
 何に證明するであらうか。過信時代と過信者とを問題外とし
 たならば、恐らくは現代人を満足せしむる證明は出來ないの
 であらうと思はれる。要するに耶蘇の死後久しき歲月を経て
 新約全書が出來、其教も漸く弘まるやうになつたものである以
 上、今に於て宗吾の精神が廣く響いて居ないからとて直に耶蘇

に劣つて居るとは言はれないのである。
 次に基督教が普く歐洲諸國に行はれるに至つたのは、各國の
 國狀が然らしめたのである。現在の歐洲諸國は、我國に比して
 何れも建國の遙に新しい國のみであり、且我國の如く國初以
 來萬世一系の天皇君臨し給ふといふやうな立派な國は一もな
 く、各國王室の祖先は皆草澤から起つて風雲を叱咤した英雄兒
 か、然らざれば民望による選舉侯の發達した者などであつた。
 従つてそれに對抗する者が出て來ないとも限らず、王位の基礎
 は甚だ薄弱なるものであつたから、之等の國王は如何にして自
 己に威嚴を加へて民衆の上に起ち、神聖なる位地を保つべきか
 の工夫を講ずるのに苦慮したのであつた。然るに丁度之に適

當なる方便として利用されたのが基督教であつた。基督教では人類の上には唯一の神あるのみで、其神は神聖萬能であると説いて居るのを幸ひに、各國々王は、其王位に登るに當り、莊嚴なる宗教的儀式を行つて、基督教の僧侶から王冠を頭に戴せて貰ふ。之れが即ち戴冠式であつて、王は神の命により其位に登るのであるから、其王位は神聖であつて、人間の侵すことを得ないものであるとの意を表し、以て大に威嚴を加へることにしたのである。殊に羅馬帝國が歐洲の覇權を握つて居た頃、其大勢力によつて弘まつたのは争ふ可からざる所である。斯様な次第であるから、各王室は勢ひ基督教を尊崇しなくてはならぬと同時に、國民をして悉く之を信奉せしめなくてはならぬ必要に

迫られ、極力其宣教と信仰とに努めさせたのである。斯うなると所謂國教であるから、非常な勢を以て忽ちの間に傳播し、遂に一般に行はるゝ事となり、因襲久しきに涉つて大なる勢力を有するに至つたものである。斯様に基督教の傳播には各王室の政策方便が與つて大なる力ある以上、單に其教の弘まつて居るのを以て、耶穌が宗吾に勝つて居るといふことは出來ないものである。

斯様に論じて來ると、耶穌には其教を繼いだ使徒があつて、今日あるの基礎を築いたが、宗吾にはそれが無い。即ち兩者の感化力に大なる相違ある所以で、到底比較すべきものでないとする人があるかも知れないが、それは宗吾が獨自一己の意見に

より佐倉領民の犠牲となり、其手段を盡したのに満足し、徒に
 聲を大にして後繼者を求めるの必要がなかつたに由るのであ
 る。然かも其絶大な愛の力犠牲的大精神は、佐倉領民は勿論
 他の地方の人々の胸裡にまでも深く刻み込まれて、多大の感謝
 と崇敬とを受けたことは、間もなく宗吾神社が建てられたるの
 みならず、暴主堀田正信さへ宗吾を刑した翌年に其靈を祀つて
 口宮明神と稱し、其五十回忌には堀田家から徳満院の尊號を追
 贈し、次で、其血族を召出して田地を下賜して其家系を繼がし
 めた等の事實に徴しても、明らかな所であつて、耶蘇が三年の説
 教の後却つて世の反感を買つて十字架に上つたとは同日の談
 でないことを首肯せらるゝであらう。即ち宗吾今日の位地は

耶蘇の死後未だ新約全書の完成されなかつた時代に比すべき
 ものであつて、此見地よりすれば、宗吾の犠牲的大精神は、耶蘇よ
 りも更に一層強く深く、廣く人心に響いて居る。即ち赤裸々の
 宗吾は、赤裸々の耶蘇に勝るといふことが出来るのである。故
 に今後宗吾の意を祖述するものが出るとしても、耶蘇死後新約
 全書の出来た年數とを對比すれば、決して遅いことではないので
 あつて、今に於て兩者の感化に關し、云爲するは當を得たことで
 ないと言はねばならぬのである。勿論耶蘇教全盛の今日、宗吾
 教が起つて之を壓倒し得べしとは思はぬ、唯兩者死後の年數か
 ら見ての感化に就て言ふまでである。又或は耶蘇は絶大なる
 教を垂れたが、宗吾は何の教をも垂れなかつたと難する人があ

欠

るかも知れぬ。けれども之も大なる謬見たるは言ふまでもない。宗吾には實踐躬行の大なる教がある。即ち宗吾の教は愛の極致大犠牲的精神の發揮である。故に之に基いて教を立てるものがあれば、耶穌教の保羅たり、馬太たり、約翰たり、其他の使徒と同一の位地に當るべきものであつて、耶穌が單に口に「他を愛せよ」と唱道したのに比し、其不言實行の教の方が、人の子に對して更に一層適切であると信するのである。

要するに基督敎から種々なる儀式、組織、其他歴史因襲を除き去つて其根本義を極はめれば神は愛なりといふ一點に歸着するだらうが、此見解にして誤りならずとすれば、耶穌は愛の發現に全力を盡したものであらう。然るに宗吾の愛は決して耶穌

欠

必要あつて斯くの如く人間の系圖を並べ立てたかといふことである。前節にも述べた如く、耶蘇は處女マリアが聖靈によつて孕んだものであるとは、新約全書の記す所であつて、マリアの夫となつたヨセフとは何等血統上の關係なきは多言を要しない。然るに一方には血統上の無關係を明記して置きながら、一方には其縁の無いヨセフの系圖を並べ立て、居るのは矛盾も甚しいものといはなくてはならぬ。が思ふに之は福音記者の最も意を用ひた所であつて、一面には神の子として尊嚴を加へて置き、一面には人の子としても猶太人の尊敬の中心人物たらしめんとして斯くは記したものであらう、そして耶蘇もまた斯様に稱して居たのであらう。アブラハムは猶太の始祖とし

神の子に何の必要ぞ人間の系圖

神の子に何の必要ぞ人間の系圖

て國人の尊崇措かざる所であり、ダビデは牧兒から起つて國難を拯ひ、遂に國王となり、四隣を征服して武威を輝かし、エルサレムに都を移し、百般の事業技藝を興し、特に宗教を以て國を開き人を導いた偉傑で、猶太の國運の盛んなる事此時に過ぐるはなしと云はれ、中興の英主として、其始祖と共に國人崇敬の中心人物であつた。耶蘇は之を道具に使つて自己に箔を附けやうと圖つたのである。

耶蘇は自ら猶太の王として生れたと稱し、至る所に猶太の王と僭稱して歩いたが、單にそれのみでは國人の輿望を繋ぐこと能はざるが故に、國人の崇敬措かざる偉傑の後裔と僭稱敢て偽稱と云ふ神の子が人の後裔と稱するは偽稱である。若し人の

神の子に何の必要ぞ人間の系圖

子なりとすれば神の子と稱するが偽稱である、又眞に人の子なりとするもヨセフとマリアとの結婚以前に出来た子であるから、ヨセフの祖先の後裔なりと云ふは偽稱である。或はヨセフとマリアの間に出来た子とすれば、新約全書の説く所は虚偽である。何れにするも耶蘇の系圖は虚偽である(すると同時に、唯一の神に敬虔なる國人の篤い信仰心を利用せんとして自ら神の子と稱したのであらう。由來猶太の王者として盛名を馳せた者は、何れも神の律法を重んじ、宗教を以て國人を導いたのである。耶蘇は勿論之を知つて居る。即ち猶太王たらんとする野心の起るに及んで、始めて宗教を利用するに至つたのである。若し然らずして眞に萬能の神の子として世を救はんが爲めの

神の子に何の必要ぞ人間の系圖

みに此世に降されたものならば、何を苦んでか王者の後たる人間の系圖を稱するの必要があらう。殊に新約全書の説くが如く、幼年時代から精神強健に智慧満ちて神の恩寵の上に臨み、兩親等も其語る所を曉る能はざる程の神智を享けて居たものならば、速に起つて神の道を説かなくてはならぬ筈である。何を苦んでか三十歳までも魔胡々々して居ることがあらう。況して眞に神の子として發達したものならば、其出生前後の奇瑞から見ても三十歳に至るまでに何等か記すべき事跡がなくてはならぬ筈である。而かも其無い所を見れば、矢張り神の子らしからぬ凡人生活をして居たのは明である。そして三十歳に至つてヨハネのバプテスマを受くるに及び始めて傳道に

三十歳まで社会の
のりる者や、
小ぢかつた心ある

神の子に何の必要ぞ人間の系圖

従事したなぞは何たる鈍い神の子であると言はなくてはならぬ。又此バプテスマを受けるの際、天ひらけて聖靈の如き状態にて其上に降つたとは路加傳の記す所であるが、既に聖靈によつて生れた神の子である、此時に及んで改めて聖靈を降すの必要が何處にあらう。若しありとすれば、前の聖靈は不完全である。さりとて幾千萬年の間にタツタ一人しか拵えなかつた龍兒を萬能の神にも似合はず、用意に作つたものである。次に路加傳の系圖と馬太傳の系圖とは大分に違ふ所がある。ルカ傳によれば、ヨセフの父はヘリ、其父はマツタテ、其父はレビ、其父マルキ、其父はヤンナと逐次遡つてダビデ、アブラハム等を経て所謂人類の祖神の子たるアダムに達して居る。然るに馬太

この系圖はキリストの神人と人の子としての
深い関係を知つてゐる。

神の子に何の必要ぞ人間の系圖

傳ではヨセフの父はヤコブ、其父はマツタン、其父はエリアザル、其父はエリウデ、其父はアキムと順次遡つて居て名の異つたの多いのは何故であらうか、兩福音書が殆んど年代を等しふして出來(基督教學者はヨハネ傳を除く)他紀元八十年頃には完成して居たと稱すたものならば斯様に相異を見る可き筈はない。尤も同一人にして異稱があつたのであるか否かは吾人の知らぬ所である。要するに神の子に人間の系圖の穿議立ては左して必要のない事かも知れぬが人の子として見れば彼の系圖利用は猶太王たらんとする野心の爲めであつたことは明かである。そは其妊娠の時マリアに告げた神の詞に、先祖ダビデ王の位を彼に與ふ云々とあるを始めとし、彼自身も猶太王であ

ると稱して居た事を、新約全書中の諸所に明かに示して居るからである。

三、 茫邈烟の如き大教祖の生涯

福音書は基督教唯一の典據……無智の神童……娼家に入らせる遊治郎……三十年茫漢烟の如し……バプテスマと斷食……三年の説教……刑死

神學の泰斗として有名なる伯林大學教授ハルナツク博士は「福音書は其内容の根本義は勿論、其叙事の歴史的價値に於て最も信をおくに足る最古唯一の基督敎文學也」と云つて居るこの事であるが、獨り博士に止まらず凡ての基督敎信徒も、教祖の人格を覗ふ可き歴史的典藉は此一書をおいて他には無いと

茫邈烟の如き大教祖の生涯

信じて居るらしい。之は尤もなことで、耶蘇の死後甚だ遠からざる時に於て其使徒の手に成つたと稱せられる新約全書のこゝとであるから之を唯一の依典として居るのは當然のことである。で爰に耶蘇の小傳を記すのも、此新約全書に據つたのは勿論である。

然るに此基督教唯一の經典たる新約全書を通じて耶蘇の生涯を見る時に吾人は其大人格に接したと感ずるよりも、多くの奇怪なる事跡と、其生涯の茫邈烟の如きとに呆れざるを得ない程度に更に大なるを甚だ遺憾とするのである。耶蘇の出生の荒誕無稽なるは前に述べた如くであるが、其後はヨセフとマリヤとは耶蘇を伴ひ、ガリラヤのナザレ歸つた。耶蘇は此地に生

長したのであるが、其状態の如何の如きは毫も記す所がないので遡として知る事が出来ない。唯僅かに路加傳に、幼時兩親に伴はれて毎年エルサレムに參詣した事と十二歳の時其姿を見失つた所が、エルサレムの殿堂の裡に坐して教師と問答して居たといふ事が記されて居るのみであるが、之は少年の神智を示さんとする意であらう。或基督教學者の説によれば、『彼は賤しい木工の子であつて其家も貧しかつた事であるから、父の職を補助すべく労働した事であらう。又其教育なども單に宗教的のもので、舊約全書を講讀するの外は別に學ぶ所なく、哲學の如き、自然科學の如き乃至諸外國の知識の如きに至つては全然皆無と云つても敢て誣言でない』と言つて居るが、之は耶蘇の

茫遊烟の如き大教祖の生涯

説教の上から見ても如何にも左様であつたらうと肯かれるのである。又或る宗教家(數年間基督教の傳道に従事し後舊約全書中の十卷を所依の經典として新宗教を興し數年前死したる人)は、耶蘇の少壯時代は常に娼家に入出して居た遊冶郎であつたと言つて居た。著者は屢此語を聞いたが、聖者に對する漫罵として馬耳東風に附して居たから其據る所の如何の如きも尋ねなかつた。従つて此説が信を置くに足るものであるか否かは知らぬが、使徒が教祖の尊嚴神聖を害するやうな事實は削除したといふ想像の如きは別問題として、新約全書に記して無い以上は、斯くの如き汚行のあつたといふ事は否定しなければならぬ。要するに耶蘇の三十歳に至るまでは何處に何をして

茫遊烟の如き大教祖の生涯

居たのか其經歷を知らうとするのは恰も雲を掴むやうな感があるのみである。

斯様に烟の如くであつた耶蘇も三十歳に至つた俄に火の如く現はれた。彼は三十歳にして其國の宗教上の習慣に従つて洗者のヨハネの許に行き、ヨルダン河の流水で洗禮を受けた時忽然として傳道事業に従はふとの志を起した。そこで此河邊の曠野で四十日間斷食して沈思冥想の後、蹶然として靜思の坐から起ち、自ら神の子である猶太の王であると稱して四方に巡遊し、盛んに教を説くこと三年餘「時は來れり、天國は近きにあり、悔改めよ」と述べ、豫備初度の猶太ガラリヤ再度の猶太及び最後の一週なる六時限で、熱心迅速に之を布教し、且つ到る處

木内宗五郎の家系
に神變不思議なる奇蹟を示した。(奇蹟に就ては後に述べる)然るに其弟子の一人なるユダが、耶蘇は叛逆の大罪人であると官に告訴したので、遂にゴルゴダの丘に樹てたる十字架上に、一斗の血を流すべき悲惨な運命に逢着したのである。

四、木内宗五郎の家系

羅馬書の妄言……千葉氏の家臣……北條氏滅ぶ……
……印幡沼開墾と土着……宗吾の後……宗吾傳の
異説……松虫姫……講談の誤傳

耶蘇は羅馬書の初めに記してある如く、『彼は肉體によればダビデの裔より生れ(ヨセフの子でないからダビデの裔に非ることは前に述べた通りである)聖善の靈性によれば、甦りし事

によりて明かに神の子たること顯はれたり』といふ神の子か人の子か不明の人物であるから系圖の穿鑿にも迷ふ次第だが、宗吾に至つては何の奇もない普通の人の子であるから頗る簡單明瞭である。

木内宗五郎の家系

木内宗五郎は惣五郎とも稱し、下總國印旛郡公津村の人で、時の名主として頗る名望が高かつた。世に佐倉宗吾と稱する所以は、佐倉城主堀田侯の領民たりしが故である。其祖先は木内源左衛門と稱し、千葉重胤の家臣であつた。重胤は北條氏に屬して居たので、豊臣氏が小田原城を攻めた時には、湯本口に在つて拒ぎ戦つたが、城遂に陥り北條氏の滅ぶるに至つて、重胤も亦食邑を失ひ、總野の間に漂浪して終に亡びたから、源左衛門は深

木内宗五郎の家系
 之を悲しみ、其亡臣等を集め、志す所あつて印旛沼の開墾を企てたが志を達せず、遂に土着して農となつたのである。此源左衛門の子を理左衛門と云ひ、宗吾は則ち其孫である。宗吾の妻をきんと云ひ、宗平阿徳阿ほう阿とちの一男三女を擧げたが宗吾が佐倉領三百八十九ヶ村の民の犠牲となつて十字架の上に正義の鮮血を流すの時、一男三女も之に坐して刑せられた。併し藩主も其犠牲的大精神を認めない譯には行かなかつたので、後に宗吾の傍系血族たる利右衛門を召出し、其家を繼承せしめ、爾後十三代の久しきを経て連綿今日に至つて居るとの事である。人間の系圖は斯くの如くであつて、耶蘇に比して何の奇もないのは已むを得ない所である。

宗吾の傳に就ても二三の異説はある。元は細川の藩士で天下を流浪して下總印旛郡公津村に来て木内理左衛門の娘の入夫となり、養父の歿後其職を襲いで割元名主となつたと云ひ、或は元藩州加茂郡小山村の人で流浪して公津村に来て佛頂寺に寄寓し、後理左衛門の入夫養子となつたなどの説があるが、當時は所謂制限結婚なる婚姻法の行はれた時代で、武家は武家百姓町人乃至穢多非人等各其階級を以て制限して居たのであるから、他郷から流浪して来た者などが百姓とはいへ、一地方に名望ある門閥の割元名主たる理左衛門の養子となる事などは到底出来得べき筈がない。況して血統を尊び未聞不知なる他郷の者と婚娶する

木内宗五郎の家系

木内宗五郎の家系

が如きは一般に忌避する習慣のあつた時代の事であるから此等の説の信すべからざるは云ふまでもない事である。又甚だしいのになると京都浪人高間左門なるもの公卿某の女松虫姫と通じ女は妊娠した所が父の怒を受け家に居ることが出来ず流浪して下總印旛郡松虫村に来て男子を分娩した。之が宗吾であつて後に理左衛門の入夫となり二十五歳養父の職を襲いだとの説がある。所が之とて取るに足りない説で佐倉風土記利根川圖志等によると天平の頃松虫姫(聖武天皇第三皇女或は官女とも云ふ)が自ら薬師佛に哀禱して病癒る事を得遂に留り薨じ給ふとはあるが高間云々などと云ふ事はない。殊に天平元年は宗吾處

異

木内宗五郎の家系

刑の承應二年を遡ること八百四十五年の昔である。如何に長命でも之程長く生きることは出来ない。従つて高間の子云々の説も牽強附會の甚だしい事は明らかである。然らば何故に斯様な誤謬が傳はつて居るかといふに當時事實を直寫して出版することは藩主乃至幕府の忌む所であつたので多少事實を變造し時代を變へて記述するの風があつた。殊に講談などは興味中心として巧みに變造した傳記を口演したので其等が流布して今日の様に種々なる異説を見るに至つたのである。こは單に宗吾傳のみに止まらず赤穂義士傳其他徳川時代の出来事に多く例を見る所である。而して同地方有志が精確なる史料に

四七

義人の生涯

より調査した事實によれば、理左衛門の實子たるは疑ない所である。

五、義人の生涯

全能なる神の子と片田舎の百姓……平凡なる生立
 ……堀田正盛の榮達……正盛の殉死……正信の相續と奇歎誅求……陰雲地を蔽ふ……宗吾の飄起……周到なる注意……久世大和守へ駕訴……最後の覺悟……生別離苦……船夫快く死す……感化力の相異……將軍へ直訴……至誠にして通せざるなし

耶蘇の三十歳にして傳道に従事するまでの經歷は逸として知ることの出來ぬが如く、宗吾も其大犧牲的精神を發揮するに

義人の生涯

至るまでは別に傳ふべきものもないのは、兩者甚だ相似て居るの觀あるが仔細に考へれば其間大なる相異がある。耶蘇は全能なる神の子である、神智の發達に伴ひ何事か傳ふべき程の事かなければならぬ筈であるのに、其無かつたのは甚奇怪であるが、宗吾に至つては下總の片田舎の百姓である、晨に起きて田畝に耕し、或は村の世話をすると、いふやうな平凡生活をして居たのであるから、別に傳ふべきものゝないのは寧ろ當然のことである。彼の變造俗傳に種々附會した説はあるが、其信すべからざるは前節に述べた如くである。

宗吾は木内理左衛門の子で、慶長十七壬子年の出生である。資性深沈で大度あつたといふが、其事跡に徴しても否むべから

義人の生涯

三〇

ざると同時に、名主としてはよく村民を愛撫したことも想像するに難からざる所である。斯くて平和なる人世を楽しみつゝある間に、事は意外の邊に發して、礫柱の上正義の鮮血を瀝盡するの悲壯事を現出するに至つたのである。其茲に至る順序として少しく領主堀田家の事情から述べなくてはならぬ。時の佐倉城主は堀田上野介正信であつて、加賀守正盛の子である。正盛は尾張守元高の後裔で、元高の遠孫遠藤左衛門尉正員の子、勘右衛門正利の子である。正利は初め金吾中納言秀秋に仕へ五百石を領し、稻葉佐渡守正成の女を妻として居た。金吾家を去つて後、正成の妻春日局の因縁に依つて徳川氏の御家人となり、三百石を受けたが、元和元年十二月大坂

義人の生涯

三一

役に功があつたので七百石を加増された。其子正盛は幼より將軍家光に仕へて寵遇比なく、元和九年十八歳にして四千五百石を加増され、加賀守と稱した。寛永三年にはまた五千石加賜され、同十年には老中職に補せられ、同十二年には二萬石を加賜され、川越城主となり、十五年には信州松本に移され、六萬九千石を加賜され、十九年には下總佐倉に移され、更に五萬石を加賜され、十五萬石の大祿を食むに至つた。斯様に寵遇が深かつたので、慶安四年四月二十日將軍家光の薨じたのを追つて、正盛は屠腹して殉死したのである。時に四十六歳であつた。

正盛の死するに及び、正信には父の遺領の内十二萬石を賜は

り年猶二十歳に足らなかつたが父の勳功により其職を襲いで
 老中職に補せられた。所が正信は生來頗る短慮で且年少下情
 に通じないので正盛は生前深く吾子の將來を慮り忠良なる
 二名の争臣を附して置いた。然るに正信は毫も其の諫言を聽
 かず徒らに激怒を加へるに過ぎなかつたから争臣も遂には口
 を噤んで唯嘆息するのみであつた。そこで正信の我意は益々
 増長し愈々横暴を逞ふするに至つたので臣下の者等は皆其
 意に逆らはん事を恐れ唯其鼻息を窺ひ奸佞の近臣等は酒色
 を勤めて只管其意を迎へたから賢良の忠臣は黜けられ奸臣は
 時を得て跋扈し一藩自ら驕奢に流れて不義の富貴を希望する
 ものゝみとなり領民の膏血を絞つて飽く事を知らなかつたの

で其苛斂誅求に堪へ兼ねて祖先傳來の土地家屋を捨て、他藩
 領内へ出奔するものさへ多く領内三百八十九ヶ村は陰雲地を
 蔽ひ荒涼悲惨見るに忍びざる状態に陥つたのである。茲に於
 て領民一同連判して減租の事を再三郡奉行及び家老に嘆願し
 たが固より私腹を肥やするに急なる奸臣等が顧みやう筈がな
 い。却て佞辯を弄して其不心得なるを嚴重に申渡したから三
 百八十九ヶ村の人民等は出願の便を失ひ頼みの綱も切れ果て
 ゝ悲憤の涙に咽びつゝ唯悄然として空しく力ない足を己が村
 々へと運んだのであつた。此時に方り深く決心の臍を固め期
 日を定めて各村名主の會合を促したのは誰あらう公津村の名
 主宗吾其人であつた。

義人の生涯

時は承應元年十月七日、印旛郡公津村の野方には、宗吾が一通の回文によつて三百八十九ヶ村の惣代が憂ひに満みた面にもまたよい分別もがなと希望の色を浮べつゝ集まつた。そこで宗吾は従来百方手を盡しても願意の貫徹しない上は已むなく江戸上邸へ出頭して藩主に直訴するの外はないと告げた。一同異議のあるべき筈はないから直に之に一決した時に宗吾は容を改めて一同に向ひ、『さて今回の事は容易ならざる義で必死の覚悟がなければ願意の貫徹は覺束ない、且つ今また多人數出府して願意の届かない時は徒らに疲弊困難を極め、苛虐の上に苛虐を受ける事になるであらう。何故かといふに此度の事に如何に隠密に行つたとて世間に洩れずに濟む筈はない、さす

義人の生涯

れば忽ち百姓一揆が起つたと全國に聞えるは勿論殊に藩廳では領民が一味徒黨したとあれば容易な處置ではあるまいと思はれる、各も篤と熟慮して其覚悟がなければならぬ』と凛乎として説き去つた面には深い決意の色が顯はれて居た。耶蘇は神の子猶太の王と稱し至る所に奇蹟を示しつゝ道を説いたにも拘らず其教に従ふものは少なかつたが、宗吾の此一語には誰一人反對するものもなく皆身を抛つて事に當らんと誓つた。之れ實に宗吾の愛の力、至誠人を動かす力が耶蘇に勝つて居るのを示すものである。そこで宗吾は欣然として『出訴の事は寔に容易でないが、各々方にも愈其覚悟ならば、まづ親子兄弟とも快く袂別し、又各家の貢租諸帳簿等は他へ託して

出府されるがよい。古語にも陽氣發處金石亦透精神一到何事不成とある通り決心さへ堅ければ願意の貫徹しない筈はない。併し大勢一度に出掛けては忽ち藩廳から差止められるやうなことになる故目立たぬやう二三名づゝ出立するがよい』と、残る隈なく説き聞かせた。此決議によつて出府する村數三百五ヶ村、連判のみで出府しない村數は八十四ヶ村であつた。斯て各々目立たぬ様に出立して、十一月十三日を期し船橋驛に集合して人數を改めて見ると、盟主とも頼むべき宗吾が見えないので、一同大に心を惱まし評議の結果其内才學の秀でた下總印旛郡下勝田村名主重右衛門と上總山部郡瀧澤村名主六郎兵衛との兩名を選んで公津村へ宗吾を見届けに出した。兩人

は翌十四日未明に船橋を發し、奸吏の目を避け迂回して宗吾の家を訪ねると、宗吾は出發に臨み、折悪しく持病が再發したので手當中であつたが、兩人に對ひ、「此分では明日出立は覺束ないが、快氣次第晝夜を兼ねて出府するから、兩人は早速立戻つて連判の人々へ自分に異心のない事を告げ、速に出府して穩かに訴訟の手續をするがよい。又願書取上げがなくとも徒黨がましい事をせず、暴言高聲等を慎み、願意の貫徹する迄は決して門前を去つてはならぬ。又蓑笠は雨露を防ぐの具、糶袋は願意叶はない内は如何なる事あるとも立去らぬ第一の調度であるから、それ等を始め萬事用意し、慎んで門前で請願するがよい」と残る方なく語り聞かせたので、兩人は其注意を喜び、急ぎ船橋驛

に至り、宗吾の旨を一同に傳へ、十六日市川行徳、千住と道を分つて江戸に着し、各宿を定め、翌十七日三百五ヶ村の總代は龍の口なる堀田正信の上邸門前に詰め掛けたので、士卒等は威猛高になつて、何故門前に立塞がるか下れ、と威嚇したが、一同更に騒がず、『我々は佐倉領内三百八十九ヶ村の農民、此度上願の筋あつて出府致せしもの、此段御取次願ふ』と動く氣色もないので、門番等も這は容易ならぬこと、奥へ注進したので、當番の士が出て願の趣を尋ねると、『斯く總代の者の出府致したのは免租の御願である。是には込入つたる次第もあり、何卒御上に直に御取次願ふ』と述べ立てた之を聞取つた士は門内に入つたが暫くして出て来て願ひの趣聞き届けるから裏門へ廻

れとの事に、一同打揃つて裏門へ廻つた所が、今日は御多用故明日青山下邸へ罷り出ると命じた。そこで一同は宿へ引取つて翌十八日早朝青山へ詰掛けた所が、其方共願の趣は地方の件故佐倉にて取扱ふべき筈、江戸邸で聞届くべきものでない、早々歸村しろと申渡した。併し一同は此願御取上なき内は決して歸國仕らぬ、是非一度御取上願ふと述べたが、士は申渡しをするが否、急ぎ門内へ駆け込んで再び出て來ない、對手にならない、仕方がないから一同止むなく宿へ歸つて、翌十九日更に相會して相談したが、頼みとする宗吾の出で來ない間は到底事の成就は覺えないと、復たも重右衛門六郎兵衛の兩人を公津村に迎に出すことにした。そこで兩人は江戸を立つて船橋まで往つ

義人の生涯

た所が、恰もよし宗吾は病氣も大方快くなつたので、郷里を出
 發して船橋まで来た所であつたので迎の兩人は大に喜び江戸
 の模様を物語り三名連立つて急ぎ其日の夕べ江戸の宿に到着
 した。待ち受けた一同は喜び勇んで、何はさて擱き宗吾の意見を
 尋ねると藩主に於て取上げなき以上幕府へ上訴しなければな
 らぬが、之は容易ならぬ大事で、月番の老中へ差出ても取上げは
 あるまいから當時公正の英名高き久世大和守の登城を待つて
 願書を差出すの外はないと述べたので、一同は其議に服し宗吾
 重右衛門六郎兵衛の他北相馬郡小泉村名主半十郎千葉郡千葉
 町名主忠藏印旛郡高野村名主三郎兵衛以上六名を總代に推選
 した。六名は更に宗吾を以て正總代とし、他の五名は副總代と

義人の生涯

なり、各名主残らず願書に連印して大願成就を祈願しつゝ、其日
 の來るを待ち受けた。
 かくて同年十一月二十六日以上の六名は願書を懐にして
 久世大和守を登城の道筋に待ち受けた。聽て城の太鼓の音が
 鳴響くや間もなく大和守の行列が門を出て來たので、六名は急
 ぎ行列に近いて「御願に御坐ります／＼」と願書を差出した
 が、駕籠脇の武士等は「御登城先なるぞ、無禮者ッ」とばかり嚴
 重に邊りを拂つて進むので、近寄る術もなかつたが、宗吾は豫て
 無禮打ちにならうと、強訴の刑に行はれやうと覺悟の上である
 から、此機を逸してはと身を挺して列に近き聲張り上げて「佐
 倉三百八十九ヶ村の領民、唯今死生存亡に關はる一大事に御座

ります。何卒此願書御取上げを願ひ奉ります」と叫びながら竹に挟んだ願書を差出した。大和守は之を聞いて乗物の内から其願書之れへと聲を掛けたので近習の士は宗吾の捧げた願書を取つて駕籠の内へ納めた。此時押への士が其方共の旅宿は何所であるかと尋ねたので三河町近江屋に御座りますと答へた。願意の聞届けられるや否やは別問題として願書を差出すことが既に容易な事でないのに首尾よく大和守の手に納まつたのを見て宗吾等は喜び勇んで旅宿に歸り他の一同にも集まるやうにそれくの宿へ通知した。今日の首尾如何と按じて居た一同は此通知に接すると齊しく我先きにと集まつて來た宗吾は一同に向つて事の次第を告げ且つ『まづ願書

は一旦納まつたものゝ何分の御沙汰のあるまでは相當の日數も掛ることであるから斯様に多人數の滞在して居るのは無益の事である。それよりは費用のかゝらぬ様小人數交代して待つことゝしそれゝ歸村されるがよい。殊に此事件前後の始末を吟味されることゝもならば我等發頭人は素より死を期して居ることであるから領民の困苦を免れるやう如何様共願ふであらうが若し一命なき後も猶ほ虐政が止まぬやうならば何卒意を繼いで領民の困苦を救ふことに盡力頼む」と述べたので一同涙を流して且つ喜び且つ謝し必ず其意を繼ぐべきことを誓つてそれゝ暇を告げて歸村の途に就いた。

斯くて六名の總代は旅宿に在つて今日か未だかと一日千秋

の思ひをして、大和守の御沙汰を待つて居た所が、十二月二日に至つて、明三日西丸下の上邸へ出頭しろとの達しがあつたから、六名は結果如何と其夜は眠りもやらず、明くれば三日久世邸へ出頭した所が、同家公用人兩名列座の上、六名に向ひ「去る十一月二十五日主君大和守登城の節、駕訴せし其方等は堀田上野介領地の民なる由、大切の御用先を妨げし科は輕からず、屹度申付くべき儀ながら、農民の由を以て此度限り特に穩便に計ひ遣はす。向後再び犯すことあらば、用捨なく嚴重の處分に及ぶから、左様心得る様」と申渡して、願書を差戻した。宗吾の胸は躍つたが、叶はぬまでも「重い仰せでは御座りますが、斯く願出ましたのは一朝一夕の儀では御座りませぬ。是迄國元は申すに

及ばず江戸邸へも再三再四嘆願に及びましたが、更に御採用なく、止むを得ず重々恐れ多い事とは存じながら、過日の強訴に及びました次第、幾重にも御寛大の御沙汰を願奉ります。今日佐倉領民は父子養育の途を失ひ、家作田畑に離れ、飢渴に迫り、道路に倒るゝもの數知れぬ有様に、御座ります故、何卒御察下し置かれ、特別の御慈悲を以て願書御採用御吟味下さるゝやう願ひ奉ります」と悲痛の語を以て窮状を述べ立てた。久世家の士も同情に堪へなかつたが、主命如何ともし難く、「成程尤もなる申立である。併しながら堀田家は當時重い御役目もあり、何分當方へ願書を留置く事はなり難い」と再度の申渡に、今日こそは念願成就の日と心に期した甲斐もなく、復たも悄然とし

て空しく旅宿へ引取つたのであつた。

正信は當時幕府の老中職である。大和守も願書を採用すれば堀田家へ疵を付けねばならぬから却下して堀田家丈の訴訟とすれば別段同家へ疵も付かぬからの考へで却下したものらしい。宗吾等には充分同情して居た事は強訴の罪を問はなかつた事で知れる。(強訴は當時嚴重に處分されたものであつた)

一同は頼みの綱も切れ果てたのに落膽して、此上は如何せんと只手を拱いて黙然として居た。茲に於て宗吾は一死以て犠牲となり一藩領民を救はなくてはならぬ時期の愈迫つたのを自覺し五人に向ひ「此度駕訴の事國元へ聞えずには濟むま

いさすれば重罪は免れない所再び故郷の水を飲むことは期し難い去りながら多くの罪人を出すのは本意でないから、貴殿等は兎も角國元へ歸られるがよい。若し吟味のあつた場合には主謀者は宗吾一人と申立てられるやう、自分は三百八十九ヶ村の名主に代り、一命を抛つて宿望を遂げるが願ひであるから、一死は更に意とする所でない、自分には猶最後の所存がある」と語る面には堅い決心の色が表はれて居た。途方に暮れて居た五名も此一語に勵まされて「イヤ貴殿一人に命を捨てさせて我々五人の者が安閑として居らるべきではない、貴殿と共に一死は素より辭せぬ所である。どうか良い分別もあらば聞かせて貰ひたい」と聲を揃へて述べたので、宗吾は深く其決心の堅

いのを喜んだが『併し一人死ぬ覺悟ならば事足るものを六人
 一時に死んでも何の益もない事である。各も其決心があらば
 自分が死んで後猶願望を遂げない場合に志を繼いで貰ひた
 い。自分はまづ生命を犠牲として幾多無告の生靈を救はねば
 ならぬ。此願望の叶はぬ時は後の世に於ても猶ほ正信と對問
 するであらう』と死すとも尚ほ窮民を救はざれば止まない大
 犠牲的精神を示したので五人は唯涙を以て感謝するの外はな
 かつた。宗吾は尚ほも詞を繼いで『今自分が多くの人民の爲
 めに、義に就いて命を捨てるのは本懐とする所であるが心に殘
 るは國元にある妻子に一言申遣して後の覺悟をも諭し、且つは
 後難をも避けさせたい事である。此事を措いては最早此世に

思ひ置くこともない』と、悲痛の語を吐いた。之れ人間の至情
 である。此情が強ければこそ一藩の人民を救ひ、天下を救つて
 福祉を得せしめんとする大犠牲的精神となつたのである。涙
 を以て聞いて居た五人は、さこそと詞を揃へて『御心中お察し
 申す。さらば之から密に故郷に歸つて後の圖をなさるがよ
 からう。我々は此所に止宿して貴殿の出府を待つから』との
 詞に、宗吾も意を決して、さらば早速往つて來る事にしやうと、別
 れを告げ、其夜の闇を幸ひに故郷をさして出發した。
 時は嚴冬、肌を劈く夜風を意とせず、霏々として降る雪を冒し
 て、人目を忍びつゝ、往來稀なる捷路を急ぎ、やがて吉高の渡口に
 着いて、渡守の小屋の戸口に身を寄せて、甚兵衛々々と小聲に呼

んだ。甚兵衛は親の代から此渡し渡守貧しい上に此頃の虐政に苦しい生活をして居たが宗吾等の義氣を頼みの綱として、細い烟を立てながら朝な夕なに其成功を念じつゝ、今しも焚火をして身を暖めて居る所へ自分の名を呼ぶ聲がする夜間の通行を禁せられた此頃、まして此大雪に不思議なこともあるものよと思ひながら、此大雪に夜を冒して来たは誰だと、咎めても、名さへ答へず尙ほも小聲に甚兵衛と呼ぶ聲は正しく聞き馴れた聲、さてはと立上つて戸を開けて見るより「オ、旦那様、寒う御座いましたらう」と云ふを制して「餘儀ない事があつて今夜忍んで来たのである、夜分の大雪山大儀ではあらうが、一つ渡して貰ひたい」と頼んだ。其頃佐倉の役人共は宗吾等が江戸

へ出て居ることを知り、道路に忍びの者を派出し、宗吾を初め重立つたものを召捕らうとして、殿重に通行人を調べ、夜間は此渡しも渡さぬ事にし、舟を鎖で繋いで封印してあつた。故に宗吾を渡せば、其身の刑罰を受けるは云ふまでもないが、宗吾の愛は此無智頑固な渡守にまで偉大な感化を與へた。甚兵衛は「旦那様の御心勞を思へば、神とも佛とも申し様は御座りませぬ、何の大儀なことが御座りませう」と凍ゆる手に、傍の槓割を取り上げ、エイツと一聲、鐵鎖を打ち断つて、宗吾を舟に乗せ、快く漕ぎ出して、向ひの岸に着いた。宗吾は深く其厚意を謝し、間もなく来る程に、戻りも頼むぞと、歸路の時刻を約して、急ぎ吾家に走せ向つた。かくて吾家に着いたものゝ如何に手配がしてあ

るやも計られぬから、吾家ながらもウカとは入り兼ね、軒に千ん
 で窃かに内の様子を窺へば、下女下男には暇を遣つたと見えて、
 妻のきんが唯一人物案じ顔に夜を闌して針仕事をして居る。
 宗吾は四邊に氣を配りつゝ、ホト／＼門の戸を叩けば、妻は大に
 驚いて針の手を止めたが、此大雪の真夜中に誰れも來る筈はな
 いと、またも針の手を動かす時再び叩く音にふと起つて戸を明
 ければ紛ふ方ない夫であるから、且つ驚き且喜び先立つものは
 涙であつた。妻は衣服を取り出して濡れた衣服と着換させ、焚
 火を添えて慰めながら、出府後の虐政の日に加はる事村々の難
 義の有様を物語れば、宗吾も江戸の模様を語り、此上は一命を捨
 て、將軍家へ直訴するの外はないと、其覺悟を告げ、就ては吾身

一人は如何なる刑に行はるゝとも厭はぬが、罪ない妻子の後難
 を避けさせたい爲め、今夜態々來たのである、此離縁狀を遣るか
 ら、四人の子供を伴つて、此所を立退いて呉れるやう、左すれば夫
 婦親子の關係もなく、後日如何なる事があるとも同罪を免れる
 ことが出来やうと、事理を諭して離縁狀を渡さうとした。妻は
 せき來る涙を押へながら、夫の仕置きを餘所に見て、其身の安樂
 を貪りたくはない、身を切る刃は受けても、繼絆を切られる刃は
 受けぬと、再三の詞も聞かず、離縁狀を押し戻したので、宗吾も其
 決心の堅いのに感じ、さらば思ひ残すこともない、夜明けて人目
 に掛つては一大事跡はよろしく頼むぞと一語を残し、身を起し
 て行かうとする。堪へ／＼た妻も、之が此世の別れかと思はず

フツと泣く聲に、四人の子供は目を覺まし、父の姿を見るより、右から取付いて喜べば、宗吾は脊を撫で頭を摩り、無心の子等の有様を見るにつけ、胸は張り裂く思ひ、さすが眼には露の玉さへ宿つたが、今は妻子の愛に引かるゝ時でない、と草鞋手早く結び付け、妻を諭し子を躑し、左右から取絶る手を拂ひ除け、さらばの一聲を後に、雪路を眞一文字に渡し、場へ走せ付けた。

渡し場では甚兵衛が、宗吾の歸りを今か〜と待つて居たので、其姿を見るより早く船を寄せ、手を取つて迎へ、間もなく對岸へ漕ぎ付けた。宗吾は『唯さへ寒い吹雲空を、殊更夜ふけ夜曉けに一度ならず二度までも老人に骨を折らせたのに、苦にもせず渡して呉れた親切難有く思ふぞ』と、感歎に禮を述べれば、甚

兵衛は『イヤ〜勿體ない〜、旦那様こそ百千萬の人の爲め命にかけてのお骨折、それのみならず常日頃受けたお情の數は知れず、神とも佛とも拜んで居ります、何のお禮のお辭が要りませうぞ』と、老の眼に涙を浮べつゝ感謝する。宗吾も憐れの老爺よと名残は盡きぬが、先を急ぐ身であるから、『随分達者で暮らせよ』と、暇を告げて立去つた。甚兵衛も『旦那様も随分お身體を御大切に』と述べて、急ぎ行く宗吾の後姿を延び上り延び上り、影の見えぬまで見送つたが、『嗚呼、萬人に代つて命を捨て、下さるお志、何たる難有いことだらう、封鎖を破つてお渡し申したも、其萬分一を報ずる爲めだ、旦那様の爲めなら何の命が惜しからう。佐倉へ聞えぬ其内に、さうだ』と、獨り言しつゝ、

義人の生涯

哀れや印幡沼に投身して仕舞つた。耶蘇は神の子にして神の道を説き世を救ふと稱しながら僅か十二人の弟子をさへ完全に感化する事が出来ず、其一人たるユダに背かれて叛逆人たる密告をされた。然るに平凡なる人の子宗吾は、敢て自ら人の世を救ふ事を呼號し廻らすとも、唯其行ふ所によつて無智頑固なる船頭からさへ斯くまで信頼且尊敬されて居た。兩者の感化力には斯様に大なる相異がある。之は何故であるかといふに、耶蘇の救世には猶太王たらんとする野心が伴つて居たが、宗吾には唯誠心誠意世を救はんとするの外、一點の野心もなかつたのに由るのである。之によつて見るも宗吾の人格の遙に耶蘇に勝ることを知られるであらう。

其

義人の生涯

斯くて宗吾は急いで江戸の旅宿に着き好機を待つて所が、幸ひなる哉十二月廿日將軍家上野東叡山へお成といふ觸れがあつたから宿願成就は此時であると思ひ喜び勇み豫て認めてあつた訴状を改めて浄書し十九日の夜を待ち六人は連立つて上野仁王門の門前なる割烹店で訣別の盃を擧げ宗吾は萬一願望達しなかつた場合の後事を五人に託し、今は思ひ残すこともない

と互に風流を談じ合ひ、

歳の矢の岩にも立てむ上野かな
行く足の跡に形ありしもばしら
後るかけ見ゆる上野の枯野かな
と吟じた。俳人ならぬ身の詞藻の如何は問ふを要しない、其

宗吾

忠藏

六郎兵衛

七

決心と雅懐とはよく窺はれる。かくて宗吾は五人に別を告げて上野山内に入り、豫て知人なる東照宮の社守を訪ひ、事の次第を告げ、此上は明日のお成を幸ひ將軍に直訴するの外、方法はな
 いがお成の道筋は、人家は表戸を締め、戸障子の隙へは目張をす
 る程であるから、途中で直訴などは到底望むべからざる所であ
 つて、東照宮社前の外は願望を果すべき所はない、就ては社前に
 隠れて居て願望を果たすから、何卒萬人の爲め此儀を托けて承
 諾して貰ひたいと頼んだ。當時の法として將軍參詣の日など
 は相當身分のある者でも到底山内へ入ることは出来ない、況し
 て法を犯して直訴するなどは以ての外、事の社守が手引した
 など、知れば社守まで重い刑に行はれるのは勿論である。併

し宗吾が幾萬の生靈を救ふと云ふ大なる愛の力には社守も動
 かされぬ譯には行かなかつた。社守は宗吾の至誠に感じて
 快く其請を許し、宗吾を引て東照宮の社頭に行き、林立した石
 燈籠の後側一際茂つた木影に一夜を過させた。
 明ければ將軍お成の廿日である。警蹕の聲嚴かに足並を揃
 へた前驅の武士は早下馬先きへ着く。やがて乗物は此所に止
 められ、將軍は徒足となり五六の近習を従へ、東照宮に參拜の爲
 め、敷石傳ひに拜殿近くに進んで来た。宗吾は比所ぞと、石燈籠
 の陰から走り出で、聲張り上げて、『下總佐倉領の農民御制法を
 犯し御訴申上奉ります』と、六尺餘の竹の先に願書を挟み、
 平身低頭して捧げた。思ひ掛けぬ直訴人に近習の人々は、大に

驚き、スワ狼籍者と下知したので、下馬先きに控へた警固の士等は、飛ぶが如く馳せて来て、搦め取らうとした。宗吾は此所ぞ萬人の安危の岐るゝ所と、少しも騒がず一層聲を勵まし、「決して狼藉者では御坐りませぬ。佐倉三百八十九ヶ村の窮民の惣代となり、恐れ多い事ながら、將軍家に御直訴申上げる者で御坐ります。何卒寛大の御慈悲を以て願書御取上げを願奉ります」と聲涙共に下つた。嗚呼至誠にして通せざるなし。

耶蘇の辯解は羅馬の將軍を動かすの力はなかつたが、宗吾の此語は當時萬民仰ぎ見るべからずとした程の將軍をさへ動かした。將軍は深く宗吾の至誠に感じて願書を採納する事を命じたので、近習の士が進んで来て願書を受取つた。宗吾の願

望は達した。併し時の掟として刑せられなければならぬ。警固の士等は宗吾に繩を掛けやうとしたが、神前で縛するは恐れ多いと、直に其場を追ひ退けられ、三枚橋の邊まで引かれて来て、其所で縛に就いたのである。(俗説に三枚橋の下に隠れて居て直訴したといふのは、此所で縛されたのを誤り傳へたのである)

斯くて將軍歸城の後、宗吾の差出した願書は上意を以て月番の老中に渡された。そこで殿中では評議があつて、十二月二十三日將軍の命を以て堀田上野介を召し、幕府諸重役列坐の上、領内の施政其當を得ないから、速に租税を薄くし、窮民を救へと上意の趣を申渡され、且宗吾並に願書等を引渡された。宗吾

使徒を去りて耶蘇を見よ
の願望は始めて貫徹したのであるが、其身は翌承應二年四月四日其四子と共に、百世に燦爛たる光輝を放つて、救世の鮮血を流すに至つたのである。

第二章 二者の救世事業

一、使徒を去りて耶蘇を見よ

基督教傳播は使徒の力也……賦身的布教は耶蘇の力に非ず……マホメットの雄略……劍端天國あり……邪教も時を得れば大勢力を得……耶蘇は種……種のない地とある地……種の價値は利用者に依て決す

耶蘇教の廣く世に行はるゝに至る基を樹てたのは其門弟即

ち所謂使徒の力である。就中ポーロは英毅にして膽略あり、殊に大雄辯家で、パレスティン、シリア、小亞細亞、希臘等の諸國に遊説し、其宣傳に最も功のあつたのは争ふべからざる所である。此等の使徒を除いて耶蘇を見る時に、其大教祖の救世事業の餘りに空漠貧弱なのに失望を禁じ得ない、其愛の力も甚だ強いものではなかつたと見えて感化力も至つて薄く、宣傳の區域も頗る狭く、殆んど見るに足るべきものはなかつたのである。若し其教を繼いで弘めた所の使徒がなかつたならば、今頃は耶蘇教の影をさへ認めることには出来なかつたのであらう。

併しながら一面から見れば、耶蘇の布教當時に於ける遊説地域は假令狭小であつたにもせも、信徒の數は少なかつたにもせ

使徒を去りて耶蘇を見よ
 よ、其教が眞理であり、偉大なる靈力があつたればこそ、良く使徒をして、献身的に布教に従事せしめ、遂に大耶蘇教國を實現せしむるに至らしめたのであるといふ事も出来やう。けれども此、献身的布教なること必ずしも耶蘇教に限られた事でない。假令其教が眞理でなくとも、一旦之を信すれば身命を賭するも尙且辭しないと云ふ例は他にも頗る多い。此種の篤信乃至迷信は特に小亞細亞、中央亞細亞等乃至耶蘇の生れた地方に甚しかつた。著しい例は回教の如きそれである。回教の起つた所は猶太の隣りの亞刺比亞であつて、其教祖マホメットは左手コーラン(回教の經典)を捧げ、右手に劍を提げて起ち、古來の亞刺比亞宗教を覆滅して新宗教を樹立すると同時に、大帝國を新

合

設し、且四隣を征服して其宗教を信せしめた奇傑であるが、之に従ふ將士等は皆一滴の血を瀝ぐものは神の榮光に浴するを得、瘡痕の光は紅寶石の如く輝き、戦死者は天國に生れると確く信じ、死を恐れず、到る所に勇戦して其敵を破碎した。マホメットの死後、國內には紛争の起つたにも拘らず、其教は駭々として弘まり、其死を去る百年の頃には早くも東は印度より西は埃及を経て西部亞非利加に至り、更に海を隔て、西班牙に亘れる大回教國を建設した。そして今日でも其信徒二億以上を有する大宗教である。耶蘇教學者を以て見れば、回教の如きは殆んど價値のない宗教であらうが、其猛烈なる布教方法によつては斯くの如く傳播して居るのである。耶蘇教とて同様で、耶蘇生存

使徒を去りて耶蘇を見よ

合

使徒を去りて耶蘇を見よ

當時に於ては殆んど價値なきものとして顧みられなかつたが、其後を繼いだもの、熱誠と、羅馬大帝國の威力と其後歐羅巴に新たな國が續々興つた事とが其傳播に大なる力のあつたのは云ふまでもない事である。語を換へれば耶蘇は種である。假令其種が良くとも之を播くべき土地耕耘に従事すべき人がなければ其種は繁殖しない。之に反して悪い種であつても熱心な農夫が肥沃な土地を耕し、よく肥料を施し栽培に注意すれば漸次其種子は改良され繁殖するに至るのである。従つて其傳播の廣狭如何を以て直に其種子の良否を斷定することは出来ぬ。又初めから善惡二様の種を提供されたならば何人も良種を採るであらうが、悪くとも一種の他なければそれを採らなく

てはならぬ。そして因襲久しきに及んでは他種を播くことは中々困難である。故に耶蘇は神の子でありながら尙ほ且つ猶太人の古來尊信せる人の子モーセの作つた律法を捨てることは出来なかつた。耶蘇はモーセの律法を以て神命の規矩とし、舊約全書を以て神出の靈典として種を改良したが、一向猶太人は其種を播き其實を味はふとはしなかつた。熱心なる種播きの名人ポーロは各地に播いて歩き希臘にまで及んだが遂に羅馬人の爲めに殺されて仕舞つた。之は希臘には不完全ながらも他に種があつたからである。其後も熱心なる種播は羅馬諸帝の虐待を意とせず其教を維持すること殆んど三百年にして、コンスタンチン帝の時遂に其自由を得て國教となつた。當時羅

使徒を去りて耶蘇を見よ

使徒を去りて耶蘇を見よ

馬は歐亞に跨る大帝國で、歐洲諸國は大抵其脚下に在つたので、其大勢力によつて忽ち傳播した。其後は順風に帆を擧げて走る船のやうなもので、歐羅巴には段々新たな國が興つたが多くは羅馬の播いた畑で、其他の畑には種がなかつたので、益々四方に傳播されるに至つた。斯様に種のない地の傳播は容易であるが、種のある地へ移殖の困難なのは、前の例に止まらず今日の耶蘇教の隆盛を以てしても、回教國、佛敎國に對する傳播が遅々たるに見ても明かな所である。

要するに種の價値は之を利用する人の如何によつて定まる如何に良種と雖も、人の播くことなければ遂には枯死して芽を出すこと能はざるに至る。故に種に絶對的の價値はない、耶蘇

の説いた所が絶對の眞理でない事は新約全書が證明して居るが、唯其人生に價値あるか否かは、其種を播き耕し果實を收穫する人、即ち信仰心の如何に因て決するのである。序に言ふが種は地に落ちて芽を出し、自然に生長して果實を結び、また種が地に落ちて次第に繁殖する野生植物も多いが、耶蘇なる種は頗る幼弱な種で、自然に放任すれば忽ち枯死すべき状態であつたのを、ポロロ其他の巧妙熱心なる園藝家が、極力之を保護し播種、耕耘施肥等にあらゆる方法を講じ、あらゆる手段を盡して生長せしむる事を得た人工栽培植物たることである。

二、耶蘇は何者を救ひしや

耶蘇は何者を救ひしや

耶穌は何者を救ひしや

園藝家の品種改良……疑ふべき人類濟度……巧妙なる奇術……萬能家の例外……惡むべき殘忍性……虚偽の救世

耶穌の救濟事業は却々盛んなものであるが、開は單純なる種子を幾多の巧妙なる園藝家が、あらゆる人工栽培の手段を盡して異つた品種を作つたと同じである。見すげらしい小輪の野菊を採つて来て、肥料を施し、多くの枝や蕾は切り去つて、見事な一輪の大きな花が咲かせるやうにし、更に之を狂ひ咲亂れ咲など色々改良すると同じことであつて、今日の耶穌教を見て、直に耶穌の示現といふは當らざるものである。耶穌の愛は無量無邊であつて、あらゆる罪惡の大海に没在す

耶穌は何者を救ひしや

人類を濟度して餘す所はないと説いて居るが、果して然りとせば、耶穌の人格は至善至美なるものと云はなければならぬ。併しながら一度新約全書を翻くに於て、忽ち此説の取るに足らないのを認めるのは遺憾である。果して其言ふ如く溢れるばかりの愛があつたのならば、古來猶太人の深く信仰する宗教を尊重して、舊約全書を經典とし、其上に更に光彩を加へた事になるのであるから、猶太人たるものは、隨喜渴仰して其教に服さなければならぬ筈であるのに、殆んど其顧みるものゝなかつたのは、矢張愛の力が左程でなかつたことを證明するものといはなければならぬ。殊に前にも述べた如く、門弟にさへ背かれるに至つたのは、愛も誠意も殆んど見るに足るべき者が無かつたと

耶蘇は何者を救ひしや
 思はれて寧ろ其人格が疑はれる程である。説く所誠意を缺き
 信を置くに足らなかつたとする想像は別問題として其愛の實
 現として行つた所を見る時に吾人は其奇々怪々なる事跡のみ
 なるに驚嘆を禁じ得ないのである。殊に其奇蹟にさへ矛盾が
 あるに至つては吾人は之を何と評してよいかを知らぬ。一二
 の例を擧ぐれば耶蘇は至る所に病人を救つた。其方法は頗る
 簡單で耶蘇が其手を病人に觸れれば如何なる病氣も忽ち治つ
 て仕舞ふ。又或時は食を求むる四千人に對してパンが七ツし
 かなかつたのに耶蘇は之を以て四千人に飽かしめた。此種の
 奇術は甚だ多いが萬能なる神の子であるから人類の想像以上
 の事も造作なく行ふことが出來たのかも知れぬ。然るに此萬

耶蘇は何者を救ひしや

空

能家にも例外があると思へて馬大傳二十一章十八には
 翌あさ都城に歸る時飢ければ路の旁にある一の無花果
 の樹を見て其所に來りしに葉の外何も見ざりしかば今よ
 り永久も果を結ぶことを得ざれと之に曰たまひければ無
 花果立到に枯ぬ。弟子之を見て奇み曰けるは無花果の枯
 るること何に速やイエス答て彼等に曰けるは我まことに
 爾曹に告げんもし信仰ありて疑はずば此無花果に於ける
 が如き耳ならず此山に命じて此より移されて海に入よと
 云とも亦成らん且なんちら信じて祈らば求ふ所ことく
 く得べし云々。
 とある。腹が空いて來る途に無花果の樹を見付けてやれ嬉
 耶蘇は何者を救ひしや

耶蘇は何者を救ひしや

空

耶穌は何者を救ひしや

しや、あの果を取つて食べやうと、傍へ来て見ると果がないから腹立ちまぎれに其神通力で立刻に生ある其樹を枯らして仕舞つたのである。何たる残酷何たる亂暴であらう。七ツのパンで四千人に飽かしめる程の神通力があるならば、熊ではないが手でも甜めて口腹を満たして置けばよいのに、自己の都合の爲めに、耶穌の空腹を知らざる樹を枯らすとは、残忍極まる事と言はなくてはならぬ。又立刻に樹を枯らしたり山を海に移す程の力があるならば、立刻に其無花果に果を成らせ、それを熟さして食べるがよい、さすれば枯れずして永く人に美果を供する。そして若し種子ある果物ならば其種子は地に落ちて繁殖する。斯くてこそ生物に幸福があり眞の神の愛を示すことが出来る。

耶穌は何者を救ひしや

のである。然るに自己の口腹を満たし得ない爲めに直に其樹を枯らすが如きは、残忍極まるもので、唯自己の意の如くならざるなきを示し、速に猶太王たらんとする野心の方便として、救世を説くに止り、衷心一片の愛もなかつたことを遺憾なく暴露して居るものである。此人の口から「人はパンのみにて生くるものに非ず」といふ高尚な語の出で居るのは、奇蹟以上の不思議と言はねばならぬが、併し之も自己の教に従はしめんとする方便に出たのに過ぎないの言ふまでもない。で此無花果の例を以て推せば、若しも彼が時を得て猶太王となつた曉に其教を信せざるもの、其意に従はざる者を殺戮することマホメツト以上であつたと想像するに難くない。恐るべきは偽善者

の愛の福音である。

三、宗吾の救済思想

不言實行……三百八十九ヶ村小區域と云ふ勿れ！
 ……冥加金……奸計圖に中る苛酷嚴峻を極めたる
 貢租……悲景慘狀言ふべからず……立憲治下の救
 濟機關……愛他精神の極致

宗吾は人の子である、神の子の如き奇蹟を示すことは出来ぬ
 唯平和なる生を樂み、人類共同の幸福を希つて極めて平凡で
 はあるが、其胸裡には溢るゝばかりの愛を湛へて居た。故に一
 朝其共同の幸福の破らるゝに及んでは奮然として起ち、其一身
 を犠牲として幾萬の生靈を塗炭の裡に救つたのである。彼は

悔ひ改めよとは云はなかつた。否言つても追付かぬ時である
 彼は不言實行、身を以て事に當り、百萬言を費すよりも偉大なる
 感化を人に與へたのである。

宗吾は奇言を以て人を惑はし、奇行を以て人を驚かすもので
 ない。併し其大人格は三百八十九ヶ村の民衆から景仰されて
 居た。三百八十九ヶ村小區域といふ勿れ、封建時代の各藩は全
 く別國の觀があつた。且つは交通不便の時代に於て、一農民に
 して數郡に跨る民衆の信頼を受けて居たのは、尋常一様の人物
 でなかつた事を明に證するものである。必ずや其平素に於
 ても篤行人を敬服せしめるものが多かつたであらう。又篤行
 家であつたればこそ進んで幾多生靈の犠牲ともなつたのであ

る。で此大救済思想を發揮して犠牲とならなければならなかつた當時の事情に就て少しく述べやう。

佐倉藩主堀田正盛が死して其子正信が家を襲いでから其藩政の亂れた事は前に述べたが此時に當り國元の家老池浦主計なる者は奸臣と語らひ其私腹を肥やすべき第一着手として領内の新規家作した者を残らず呼出し高一石に準じ銀四匁三分づゝの割合を以て冥加金上納を申付けた。領民等は其不法に驚いたが泣く子と地頭には勝たれぬ譬へ詮方なく上納した池浦は此取立金を私慾に充てやうとしたが初めに藩主を欺いて置き其後永久に私腹を肥すが上策と考へ使を江戸に遣り此度領内の百姓共御上の襲職を賀し冥加金獻納を願出ましたから

御收納を願ふと述させて其金を届けた。所が江戸邸に於る正信は十二萬石にされたにも拘らず先代十五萬石の格式を一朝に變更することは出来ず費用多端の上に更に奢侈に流れて益費用の嵩む折柄であるから特に池浦を召出して大に之を賞した。池浦は計畫の圖に當れるを喜びながらもさあらぬ體に益俵辯を弄し且語を改めて今日の場合に引換へ萬一飢饉凶作等の際細民共扶持米等願出た場合は救はなくてはならぬが倉庫は充ちては居らず何何したものかと憂慮に堪へぬが主君の御意見は如何であるかと尋ねた。短慮の正信は國元の事は一切其方に任せてあるのに今更尋ねるは不調法であると不興の體であつたから池浦は心中大に喜び早々暇を告げて佐倉に歸り

奸臣等と謀り、貢米の率を従來の一石の高へ一斗二升宛の増と定め、且此事を前以て沙汰をすれば、百姓共も相談の上、不服を申立てるやも計られないから、貢米收納の時、俄に増高割付を渡して申付ければ、村々の名主、庄屋共は事の急なのに驚き相談の暇もなく、不服ながらも納めるに定まつて居るから、貢米上納期に之を實行することに決し、其他人頭税十五歳より六十歳に至る男女一日一匁、家屋税疊一疊に付一日一匁、家宅五軒以上の棟を有する者は一年一匁、雑税では絹布を着する者は一年一匁、家人十五歳より六十歳に至る者一人一匁、草鞋十足、牛馬税一疋、一年三匁、商業税、酢醬油、太物、荒物、小間物類、一年商金百兩に付五兩、一寺院一

年金一兩、人の生れて籍を入れるにも税があり、年始五節句、歳暮祝儀等、其人に應じて税があり、其他農産物たる野菜、大根、煙草等に致るまで一として、餘す所なく苛税を賦課する事を企て、之も貢米上納期に俄に申付け、事に決して居た。斯くとは知らぬ領民等は、貢米上納期も近いたので、例年の通り準備して居ると、思ひがけなくも苛酷なる大增税の命が下つたので、青天の霹靂の如く驚き、減税の事を藩廳へ願出たが、更に採用のない許りか却つて村名主共の諭し方が不行届だから、細民が服さないのだと、嚴重に叱責し、手錠或は拘留に處し、暴戻言語に絶したものであつたが、事が急であつた爲め如何ともする事が出来ず、三百八十九ヶ村の領民は、齒嚙みをしなから、是非なく、此年は納税した

が領内は悲景慘憺目もあてられぬ様となつたのである。翌承應元年には、前年の苛税に恐れ何とか免除の願をしなればならぬと寄々相談して居た所へ、此年は前年の苛税の上更に小物成、大小豆の類に至る迄過分の割附をし多くの探吏を派出して領民の動靜を偵察し若苦情を唱へる者があれば容捨なく捕へて拘留に處し苛酷嚴峻を極たから何れも泣く／＼貢租其他の運上を納めたが細民中には額に汗して得た所のもの全部を納めても租税に足ぬものもある程で、悲慘困憊の狀は一層加はッ、父母妻子を養ふ事が出来ず祖先傳來の家作田畑を賣渡し、或は住み馴れた郷國を捨て他國他領へ轉じ流離困頓を極むる者千七百三十人、破産の戸數八百八十餘、廢寺十一宇に上つ

た。之が僅に一年の間である。斯戸口を減じたので田畑を耕すものなく荒るに任せた上地千三百餘筆千有餘石に及んだ。此不毛の蕪地の検査を願つても採用せず他國他領へ轉じた者の租税の免除を願つても許さず其等の租税さへ村々組合で辨納しろと嚴命した。斯様な状態であつたから、残つた農民は益々困難を加へ、減租の願が聞届けられなければ到底佐倉領には居住出来ない事になつた。此時に當り宗吾の大犠牲的精神によつて一藩領民は全く此虐政の裡から救はれたのであつた。現今の政治状態では、租税法が確定して居て如何なる地方と雖も、決して過重の賦課を受ける事はない。況して立憲政治の下に虐政などのあらう筈はないが、時に或は地方官廳などの行

政に不法な處置を見ることはある。併し斯様な場合には行政裁判所に行政訴訟を起すなり、或は民事裁判所に私訴を提起する事が出来、それ〴〵救済機關が備はつて居るから、人民の權利は安全に確保されて居る。然るに封建時代の政治は斯様に完備したものではなかつた。各藩それ〴〵藩政や租税の率なども異つて居て、暴主奸臣等は随分虐政を行つた例は少なくない。此場合困ることには藩の虐政を藩廳へ訴へたとて却々採用されない、さらばと云つて藩廳を経ずに幕府の老中などへ訴へることは出来ない、若し宗吾等が久世大和守に訴へた様な方法をとれば強訴の罪に問はれる。而かも大抵は却下される。將軍へ一訴などは尙更難事である。將軍の外出は容易にある事でない。

い。そして其外出には路筋の家々へは戸障子へ目張りをさせ、街路へは人民の出るを禁じ、嚴重な行列で行くのであるから、途中の上訴などは思ひも寄らぬ事である。斯様に訴訟が困難であつたから、何れの地方でも藩の虐政に對し、領民は訴へるに路なく、止むを得ず、旗を押樹て、百姓一揆などを起したものである。併し宗吾は斷じて斯様な暴舉には出なかつた。先づ手段を盡して再三穩和に藩に訴へた。そして其容れられないに及んでも尙ほ且つ暴舉に出づる事を避け、獨り犠牲となつて至難の事に當つた。之實に愛他精神の極致を示すもので、黙々の裡幾百萬言の空論的説教に勝る所のものを後人に語り傳へて居るのである。

宗吾の救世に現實にして且永遠の生命あり

四、宗吾の救世は現實にして且永遠の生命あり

偽善と眞善……偉大なる救世的精神……一言半句の申開なし……貢租忽ち舊に復す……處刑評議……女子に男名を附す……父子死刑

耶蘇の愛は無花果の例で説けた如く、自己本位の愛であつた。「敵を愛せよ」といふ善言は吐きながらも、自己に都合よからぬ者は之を滅すの残忍を敢てして憚らなかつた。其説く所は畢竟偽善を詞の綾に織り出したまでである。宗吾に至つては別に愛も救世も説かぬが、其大精神の實現は眞に憐むべきものを救ひ、罪惡を滅ぼし、久遠に愛の福音を傳へて居る。

宗吾の救世は現實にして且永遠の生命あり

まづ宗吾の愛の現實の點に就て見るに、當時の風として百姓一揆位は起し兼ねないのであつたが、宗吾の起つたのに信頼して、誰一人喧噪するものもなく、又其後は郷土を出奔するものもなく、虐政を忍びつゝ、靜かに其結果を待つて居たといふことは如何に宗吾の救世的精神の偉大であつたかを語るものである。かくて宗吾が死を期して上訴し、至誠將軍を動かして願書は採納せられ、正信は幕府に召されて窮民を救ふべき上意を受けるに至つた事は前に述べたが、此時正信は渡された宗吾の願書を一讀すると、領民の窮狀を訴へ百姓の無事生活出来るやう仰下されたといふの外更に藩主を誘ふ語もなく、文章は美ならずとも、其裡に籠めた至誠は惻々として人を動かさずには居ない。

宗吾の救世は現實にして且永遠の生命あり

之を見た正信は一言半句の申開きもなく唯々恐れ入つて早々歸邸し直ちに家老小島式部を呼出し「今日殿中で存じもよらぬ耻辱を受け慚愧に堪へない最早役目の儀も今日限りである。之といふも其方始め領地支配人共不届の致す所である。先達て領分の百姓共が門前へ參つた節も一應の取調もせず國元へ追退けたるなどは不届至極ではないかそれが爲め百姓等も止むを得ず將軍へ直訴に及び今日殿中に於て評議の上此願書と總代とを渡された。斯くなる上は我家の滅亡にも及ぶべきは必然である。直ぐ様佐倉へ急報して私慾邪曲に關係した者は時を移さず罪に行ひ租税はすべて従前の通りに復し雜税を除き一々改革して早々領内へ觸れ領民を安堵させ又宗吾は町奉

行所役宅から他の五名は其旅宿から何れも届け濟みの上引取り禁獄申付け番人を付し食事其他支給等粗略のないやう取計らへ」と以ての外の憤怒で厳しく申達した。藩中は狼狽して上を下へと混雜し江戸佐倉間の急使は櫛の齒を引く如く租税は忽ち舊に復して領民一同宗吾の現實なる救世の愛に浴するを得たのである。

一藩領民を塗炭の苦より救つたといふ事は封建時代に於ける一農民の力としては絶大なるものである。併しながら之は宗吾の救世の一部分に過ぎない宗吾の救世は更に偉大にして更に永遠に力あるものである。宗吾及び他の五名の總代が捕へられてから其處分に就て評議があつた結果宗吾以外の五名

宗吾の救世は現實にして且永遠の生命あり

宗吾の救世は現實にして且永遠の生命あり

は佐倉十里以外の地に追放と決したが、奸臣等は宗吾の爲めに自己の私曲を發かれたのを深く憎むの餘り、宗吾を以て多年名主勤務中私慾横領を營んだものと讒誣し、且つ法度の徒黨連判を爲したるのみならず、領主を輕んじたることは此上もない重罪であるから、妻子諸共磔刑に處するが然るべしと主張した。正信は、宗吾は法度を犯したるものであるから、刑罰は當然であるが、何の關係もない妻子の同罪は當を得たのでないと言つた。けれど、奸臣等は佞辯を弄して巧みに述べ立てたので、正信も遂に動かされて、男の子等は死罪に行ふもよいが、婦人女子の同罪は然るべからずと言つて、奥に入つた。そこで、奸臣等は宗吾の長男宗平及び三女を呼び出し、おとくを徳治、おほうを乙治

宗吾の救世は現實にして且永遠の生命あり

おとくを徳松と、それと、男の名を付け、すべて男子であると稱し、四子共に死刑に行ふことにした。(妻には道に男の名を付することゝ出来ぬので、之は刑罰を免れた。俗説に、妻子同罪といふことの誤聞なるは、其菩提寺たる東勝寺の過去帳及び其後裔所藏の舊記によつて明かだ、妻は宗吾等刑死後、墨染の袖に行澄まして居たが、十七年を経て寛文九年に病死したのである)斯くして、宗吾は十字架の上の人となつたのであるが、其十字架上の犠牲と最後の一語こそ、炳乎として萬世を照すべき久遠の愛の生命である。次章に於て十字架上の兩者を比較して見やう。

反逆者として刑せられたる耶蘇

第三章 十字架上の兩者

一、反逆者として刑せられたる耶蘇

救の聲は微妙に響く……新王國の建設は近きにあ
 り……價值なき人格……高尚なる祭司長……至る
 所に惡まれたる神の子……巧妙なる遁辭……耶蘇
 よりも殺人の強盜が善い……棘の王冠……耶蘇は
 國權を認めず……反逆者に非ずして何ぞ

「悔改めよ、天國は近けり」救濟の聲は微妙に人の耳に響く。
 かくて至る所に愛を説き、幾多の生靈を救つたにも拘らず之を
 信する者の少なかつたのは何故であらうか。并は猶太王たら
 んとする野心の方便に過ぎなかつたからである。至誠の力が

反逆者として刑せられたる耶蘇

欠けて居たからである。元來耶蘇が神の子と云ひ、またアブラ
 ハム、ダビデの系圖を稱するも皆此野心の爲めに他ならぬので
 ある。即ち一面には偉大なる英主として國人の尊崇する人傑
 の裔と稱して、其信望を繋ぎ、一面には神の子として、信仰厚き國
 人の歸服を得て、猶太王たる位置を得んしたのである。之は
 前にも述べた如く、純正なる宗教改革家としては何の必要もな
 いのに拘らず、到る所に我は猶太の王であると説いて歩いた事
 實によつて證明される。之を以て見れば、「悔改めよ、天國は
 近けり」といふことも、單純なる宗教的の救済に非ずして、耶蘇
 の主權によつて治めらるべき新王國の建設は近きにあり、從來
 の服従關係を棄て、耶蘇に従へといふ意味を含んで居るので

ある。

斯様に其救済思想なるものは野心の方便たるに過ぎなかつたから門弟たるユダに背かれて猶太の祭司長并に執政官に、反逆者であることを密告された。新約全書は此事を記して、ユダは僅かの金の爲めに耶蘇を賣つたとあるが、僅かの金の爲めに背き去られる程であれば、尙更耶蘇の人格は價値なきものとなつて仕舞ふのである。又猶太の祭司等は、當時最も高尚な役で、其職務上最良なる道徳により修養された人々で、豫てより其教旨によつて神の子救主の來らんとし、約束を継ぎ受けて確く信じて居たのであつた。故に若し耶蘇が眞に神の子たる愛を示したならば、彼等は隨喜して之を仰へたに違ひない。況して

反逆者として刑せられたる耶蘇

ある。

耶蘇の説いた所は猶太人の經典とする舊約全書は神來の靈典として、毫も之に異論を挾まなかつたのみならず、更に其上に至上の愛を示したといふのであるから、猶太人等は眞に救世主の降臨と渴仰すべき筈であつた。然るに事の反對に出たるは、耶蘇は其神の子救主降臨の信仰を利用したに過ぎざりし故、其愛は眞善のものではなく、丁度無花果の例の如くであつたので、國人からは惡まれ、門弟からは密告され、祭司長及執政官等からも惡まれて、遂に當時の主權者たる羅馬皇帝の命を帯びたる太守ピラトから死刑の宣告を受けなくてはならぬことになつたのである。

反逆者として刑せられたる耶蘇

ピラトは耶蘇を審問した。汝は猶太人の王なるかとの間に

對して、耶蘇は「汝の云ふところの如く我は王である、我は之が爲めに生れ、之が爲めに世に臨んだのである」と答へた。併し「我國は現在の國でない、若し我國が現在の國であるならば我等はわれを猶太人に渡さざる爲めに戦ふであらう」と巧妙な言を弄した。果して現在の國でないとしたならば天國といふのであらう、之は人類萬物を創造した神の在る所、此所に王たらんとするならば決して猶太の王と地域を局限すべきでない、又僕等が我を渡さざる爲めに戦ふであらうなど、いふ語も左程に強い力を有たぬ。何故といふに僕の中から背くものさへ出で、其人數も極めて僅かで戦ふべき熱誠を捧げる者もなかつたからである。此時は踰越の祝といふ年祭の前であつて、此祭

反逆者として刑せられたる耶蘇

には囚人の一人を釋す例であつたので、ピラトは猶太人に向ひ「我は汝等の例により踰越の節に一人の囚人を汝等に釋す、汝等は猶太人の王を釋さん事を願ふか」と問ふた、所が猶太人は「此人ではない、バラバを釋せ」と叫んだ。バラバといふは強盜殺人の大悪人であつたが、國人等は耶蘇よりも此悪人を釋す方が良いと云つた。猶太の王が猶太人に惡まれることも亦甚しかつたものである。其所でピラトは猶太人に向つて、然らば基督と稱する耶蘇を如何にすればよいかと云つた所が、民衆は聲を揃へて、十字架に釘づけにしると叫んだ。ピラトは乃ちバラバを釋し、耶蘇を鞭つて十字架に釘けんが爲め、兵士に付した。そこで兵士等は棘で王冠の形を編み、それを耶蘇の頭に冠らせ、

反逆者として刑せられたる耶蘇

反逆者として刑せられたる耶蘇

絳色の袍を着せ、葦を右の手に持たせ、其前に跪いて、猶太の王
 安らけく在せと云つて嘲弄した。如何に王たらんとする耶蘇
 でも棘の王冠は歓迎しなかつた事であらう。新約全書の記す
 所によると、此時までピラトは尙ほ耶蘇を釋さうとしたと述
 べて居る。即ちピラトは此淺ましい姿の耶蘇を引出して猶太
 人等に向ひ、「我は彼につき何の罪をも見出す能はず」と語つ
 て耶蘇を救はうとした。けれども猶太人は「我等にも國の法
 律がある、その法律に照せば彼は死刑に處せらるべきものであ
 る(死刑の宣告權は猶太人にはないから羅馬の太守に訴へたの
 である)何となれば彼は自ら神の子猶太の王と僭稱して居るか
 らである」と答へた。ピラトは之を聞いて益懼れ再び耶蘇を

反逆者として刑せられたる耶蘇

公廳に連れ戻つて、汝は何所の者であるかと問ふたが、耶蘇は答
 へなかつたので、ピラトは更に何故に答へないか、我は汝を十字
 架に釘ける權威もあり、又之を釋すの權威もある、汝は之を知ら
 ぬかと云つた所が、耶蘇は之に答へて、汝は神から權威を賜はら
 ないから我に向つて其權威はない。我を汝に渡したものの、罪
 こそ大きいのであると云つた。(耶蘇は自己を省みる徳を欠い
 た人である、凡人でも少しく注意深い人ならば人から悪くでも
 言はれ、ば我身の非行を省みる、耶蘇も弟子から背かれたらば
 まづ己の徳の足らなかつたのを耻づべきであるのに、其事なく
 して他人の罪を數へるのは小人である)ピラトは其罪の無い事
 を知つて更に彼を釋さうとしたが、猶太人等は、若し彼を釋せば

反逆者として刑せられたる耶蘇

カイゼルに忠臣でない、自己を王なりとするものはカイゼルに背くものでなくて何であるかと叫んだので、ピラトは止むを得ず再び耶蘇を引出して、汝等の王を見よと猶太人等に云つた所が、彼等は聲を揃へて、王に非ず、彼を除け、速に十字架に釘けよと叫んだ。ピラトは尙ほ、我は汝等の王を十字架に釘けることが出来やうかと云つたが、民衆は、我等にはカイゼルの外に王はないと云つたので、正義に與するピラトも遂に語屈して、彼等に耶蘇を十字架に釘けることを許して、不義者となつて仕舞つたと述べてあるが、之は果して如何であつたらうか。當時赫々たる國威を後楯とし、向ふ所敵なき陸軍や、行政的大系統を有する一大帝國の使臣たる大守ピラトが、被征服者たる猶太人の喧

反逆者として刑せられたる耶蘇

囂位を恐れて、自己が釋さんと欲する者を枉げて刑するやうな事があつたらうか、又羅馬帝國の太守たるもの、權威を認めないと公言して、憚らぬ程の秩序破壊者を釋す程に寛大であつたらうか、又神の子と謂て驚いたといふのは事實であつたらうか、一體當時猶太附近の各國は大抵多神教であつた。羅馬人の如きも然りである。唯猶太人だけは古來唯一の神を信じ、特殊の信仰心を有つて居た。故に基督死後、ポーロは希臘に布教して、羅馬人の爲めに殺され、其後三百年も羅馬人は基督教を虐待した程であつた。故に猶太人等が其特殊の信仰による神の子である、と云つた所で、異教徒たる太守ピラトが驚いて尊敬する筈はなからうと思ふ。之等の諸點は大に疑問であるが、それは別

群衆嘲罵の裡に死したる耶蘇

問題として、兎に角自ら猶太王たりと僭稱し、時の主權者たる羅馬帝並に其任命せる太守の權威及び其國人の法律を認めない事實がある以上は、立派な社會の秩序破壊者であつて、叛逆者として刑せられるのは當然である。例へば今日の社會に、何れかの國に突然何れからか突出した人物が、我は王である、我命する所に従へと言つて、其國の法律や官憲を無視したらば如何であるか、何れの國と雖も、公の秩序破壊者として嚴重に罰せすには置かぬであらう。耶蘇は斯くの如くにして十字架に上つたのである。

二、群衆嘲罵の裡に死したる耶蘇

論越節の犠牲……ゴロゴダの丘……人の死なんと
 する其言や善し……弟子の従ふもの僅かに一人……
 ……太陽光を失ふ……神よ捨て給ふか……一切の
 虚偽を一言に自白す

猶太には踰越の節といふ年祭があつた。此祭日には小羊を殺して之を焼き、苦菜と共に食する慣例であつた。之は猶太の有名なる由來を遡つて紀念すると同時に、神より來れる代贖者が世の罪の爲めに死するといふ意味を表はす儀式で、小羊即ち犠牲であつた。然るに耶蘇の死刑は此日に行はれたから、世の罪の犠牲となつたとの説を門弟等が唱へるに至つたのである。で、此祭日には數多の男女が國中到る所から其都へ集合したのであつて、當時エルサレムの人口は六十萬市の内外に各

群衆嘲罵の裡に死したる耶蘇

群衆嘲罵の裡に死したる耶蘇

地から集まつた人数は二百萬以上三百萬以下で、多數の人は市外に野營を設けて之に宿つて居たのである。

此祭日の午前九時、耶蘇と外二名の罪囚とは、一隊の羅馬兵士等に護送されて死刑執行地に達した。死刑執行地はエルサレムの郊外程遠からぬ小高い圓形の丘の上で、其頂上は恰も人の頭に似て居るからゴルゴダ即ち髑髏の場所と呼んだ所である。

三人の囚人は各釘付らるべき十字架を擔はせられて來たのであるが、其罪標には、他の二人は強盜、耶蘇には、『猶太の王ナザレの耶蘇』と記してあつた。此所で耶蘇は二人の強盜と共に、其擔つて來た十字架に、手足共に釘付けにされたのであつた。此惨刑に逢つても耶蘇は毫も復讐の念は起さず、却つて此無慈悲

群衆嘲罵の裡に死したる耶蘇

なる兵卒を憫み、『父よ彼等を救ひ給へ、其爲す所を知らざるが故なり』と云つて、彼等を赦さん事を神に祈つたとの事である。

之即ち所謂其至上の愛である。併し斯様な語が果して人の飢えたるを知らざる無花果を枯らす程の耶蘇の口から洩れたか否かは疑問である。尤も『鳥の死なんとする其鳴くや悲し人の死なんとする其言ふや善し』と古語にもある通りで、日本などでは平凡人でも其死に臨んでは驚くべき立派な詞を遺して居る例が甚だ多い又悪人でも善なる性に歸つて居る例も少なくない。此例を以て推せば耶蘇の此位な言は日本人には別段珍とするに足らないのである。

斯くて三個の十字架は立てられたが、耶蘇の弟子で其所に居

群衆嘲罵の裡に死したる耶蘇

たものはヨハネ一人であつた。そして其一人のヨハネさへ群衆を憚つてか離れた所に居たとの事である。此所に於て其犠牲に就て疑問が生ずる。世の罪の犠牲となつて、耶蘇が天國へ行くのならば、弟子等は擧つて來て之を祝福すべき筈である。況して耶蘇がピラトに答へた如く、耶蘇の建設する國が現世に非ずとすれば喜んで行くべきである。然るに耶蘇は悲んだ、何たる矛盾であらう。それを述べるに先つて刑場の模様を述べやう。刑場の周圍は群衆を以て満たされた。併し一人のヨハネが遠く人目を避けて、悄然として様子を見て居るの外、誰れとて耶蘇に同情するものはなかつた。群衆は口々に「若し神の子ならば十字架を下りて來い」彼は他人を救つたと云ふが自

群衆嘲罵の裡に死したる耶蘇

分を救ふことは出来ない」「猶太の王ならば自己を救へ」と罵つた。如何なる悪人でも惨刑に處せられるを見たり聞いたりしては、多少の同情者は出やうものを、さりとては餘りに哀れな末期である。で苦惱の三時間の終つたのは正午であつたが、時に黒雲は暗澹として空を蔽ひ、太陽は其光を失つた。此不思議なる暗黒がつくこと三時間で、午後三時に至つて最後の詞をのこして息絶えた。此時地は震ひ、岩は裂け、墓は開けたとの事である。

最後の詞は何を語つたか。耶蘇は死にたくなかつた。死を悲しんだ。現世を捨てたくなかつた。天國も虚偽である。犠牲も虚偽である。すべての奇蹟も虚偽である。どうしても死

群衆嘲罵の裡に死したる耶穌

にたかない唯猶太の王になりたかつたのだと云ふことを自白して仕舞つたのである。新約全書馬太傳及馬可傳共に其時の語を『エリ、エリ、ラマサバクタニ』(神よ捨て給ふか)と記して居るのは之を證するものである。彼は死にたかないから神に捨て給ふのかと悲しい聲を絞つたのである。犠牲が眞實であり、天國が眞實であるならば汚れたる世をば喜んで去るべきである。何を苦んでか神よ捨て給ふかなぞといふ情ない語を吐くの必要があらう。若し又耶穌は死にたかないから神よ捨て給ふかと泣く時に神は耶穌を天國に召すを可としたとするならば兩者の意志は相反するもので耶穌は到底神の子といふ事能はざるものである。更に奇蹟の方面から見ると、彼は至る所に

群衆嘲罵の裡に死したる耶穌

意の如くならざるなき奇蹟を示し、風と海とさへも従ふと言つて居る。之程の力があるならば泣言などを言つて居らずに何故人の心を動かして死刑を免れなかつたか、何故此場に奇蹟を示して逃げ去らなかつたか、それが出来ずに神よ捨て給ふかと悲みながら死んだのは、奇蹟が全然虚偽なることを證するものではあるまいか。次にヨハネ傳によると、十字架上の彼は渴くと云つたので兵士は酢を飲ました。すると彼は事竟んぬと云つて死んだとある。神の子が苦んで人の子の救を求めると云は、何たる奇現象であらう。殊に平生彼の説く所から推せば、今や肉に死すとも大に靈に生きんとする時である。何が爲めに平凡人以下の苦しみ方をしたのであらう。要するに十字架の上

従容磔に就ける義人宗吾

一三

の耶蘇は捨るか云つて神を怨み命を惜しがり、渴くと云つて苦しんだのであつて、大修養ある人とは思はれぬ程に見苦しい死状であつたといふ事を想像するに難くないのである。若し我古武士の最期の潔さ加減を見せてやる事が出来たとしたならば彼は果して何と言つたであらうか。

三、従容磔に就ける義人宗吾

助命の教願……處刑期日を繰上ぐ……義人の子は孝子也……正邪神明の知るあり……従容十八箇を受く……永遠の生命茲に發して萬世に輝く

猶太の國人は擧つて耶蘇の死刑を求めたが、宗吾の場合とは全く相反して居る。初め宗吾及四子が仕置と決定したと聞

従容磔に就ける義人宗吾

一三

くが否、領民一同は此大恩人の處刑を餘所に見ることは出来ぬと、坂戸村名主善兵衛外二名を總代として助命を願つたが、宗吾を悪むことの深い奸臣等が容れやう筈はない直にそれを却下した。さらばせめては四子だけはと只管嘆願したが、藩廳は更に聞入れないので、總代等は江戸へ出て藩主邸へ願書を差出した。けれども此所でも取上げないので一同止むを得ず歸村し、各村名主と熟議を凝らし、僧侶の手を煩はしたらば何とかならぬこともあるまいと、旦那寺外十三寺を以て重ねて哀願に及んだ所が、奸臣等は斯く頻々哀願が出るやうでは、遂には助命しなくはならぬやうになるかも知れぬから、事面倒にならぬ内に處刑するが策の得たものであるとして、期日を繰上げて八月四日

從容磔に就ける義人宗吾

としたので、領民等は遂に策に施すべきものなきに至つたのである。

死刑執行の場所は公津村宇下方の原野と定められ、愈其日となると、獄屋から引出された宗吾は四子と共に此所へ護送されて来て、日々の拷問苛責に瘦せ細つた體を荒々しく十字架上に縛められ、四子は荒蕪の上に引据えられた。見上げ見下ろす顔と顔子等は歎きにワツと泣く、宗吾の胸中は如何であつたらうか。併し其肉體こそは瘦せ枯れたれ、大義人の犠牲精神は愈々光輝を加えて愛しい子等の無残な姿を見ても涙一滴落さなかつた。やがて午の上刻(今の十一時頃)となると、奸吏はまづ宗吾に死刑の言渡をして首を刎ねやうとすると、宗吾は「暫く御待

從容磔に就ける義人宗吾

ち下され、父の直訴の科によつて諸共の御仕置は難有く御受はしました。が、息ある父の目前に御成敗を見せまします、暫しの間とは云へ不孝と思ひますから、なるべくは父より後に御願申たいと願つた。嗚呼、年こそ行かずとも、流石は大義人の子、其身の最期に及んでも、尙ほ孝道は忘れなかつたのである。情容捨もない奸吏共、此しほらしい願をも聞かばこそ、其聲の終るも待たず、弾左衛門が振り上げた白刃の閃くと見る間もなく、憐れや宗吾の細首は地に落ちた。續いて他の三子も残らず暴虐の刃に斃れたのは痛ましいとも無残とも、言はうやうやない限りである。斯くて毒刃は愈々宗吾の身に及ぶ順序となつた。此時宗吾は大音を揚げ「正義により公道を履み暴虐を除かうとする者を

從容に就ける義人宗吾

一編

殺戮する正邪何れに在るかは必ず神明の知し召す所である。我一念は如何で朽ち果てやう。我魂魄は永く此土に在つて長く領民を救護せずには置かぬ」と叫んだ。此語終るが否、檢使の指揮に、彈左衛門は大身の鎗を宗吾の目先につけ、閃めかすよと見る間に左右の腋から突入れた。宗吾は少しも身動きもせず、顔色自若として居たが、突くこと十八鎗で息絶えたのであつた。

嗚呼何たる悲惨ぞ何たる壯烈ぞ併しながら宗吾の永遠の生命は實に茲に發して萬世に輝くのをみるのである。宗吾が正邪は必ず神明の知し召す所であると云つて、自若として四子の處刑を見從容として自己も刑に就いたのは、死生を超越した所

從容に就ける義人宗吾

一編

に一大光明を認めて居たからである。此一大光明即ち正義永遠の生命であつて、我一念は朽ちない、我魂魄は永遠に領民を救護すると云つたのは、其無限の愛を永劫に傳へたものである。(正義の永遠の生命無限の愛は大和魂に發するが、此事は後に述べる)。之によつて見れば、宗吾は唯現實に佐倉領民を救つたのみには止まらず、正義と愛との力を以て、永遠に罪に汚れたる人類を救済するの教を垂れたのである。之を彼の耶蘇が神よ捨て給ふかと弱音を吐き、渴くと苦んだのに比較するに於て、兩者の人格の相距ることの餘りに遠いのに驚かすには居られないのである。

三百八十九ヶ村の民衆一人の泣かざるなし

一五

四、三百八十九ヶ村の民衆一人の泣かざるなし

三百八十九ヶ村の老若男女雲の如く集まる……泣かざるもの宗吾と奸吏のみ……耶蘇の悲痛と孰れ

耶蘇が刑に處せられるのを見た民衆は何れも猶太の王なら下りて来いとか人を救ふ力があるなら自分を救つて見ろとか口々に罵つて一人として同情する者もなかつたのは前に述べたが宗吾の場合はどうであつたか。領民一同は助命の爲にあつたので策の施しやうもなく唯茫然たるの外はなかつたが愈處刑の日となるとせめては最後の回向を營まうと誰誘ふとは

三百八十九ヶ村の民衆一人の泣かざるなし

一五

三百八十九ヶ村の老若男女は雲の如く集まり之を聞いた他國領のものまでが大義人の最期を弔慰しやうと集まつて来たから遺に廣い刑場も立錐の餘地もなきまでに群衆に満たされたのであつた。そして群衆はまだ宗吾の見えぬ内から泣いて居る。やがて其痛ましい父子の姿を見るに及んでは聲を上げて泣き血腥い風の吹くに至つては群衆の嘆き叫ぶ聲に天も地も崩れんかと思はれるばかりであつたとの事である。此刑場内外幾百萬の人衆の内涙一滴落さなかつたのは従容自若たる大義人宗吾と冷酷氷の如き死刑執行の奸吏とのみであつた。之を彼の耶蘇が『神よ捨て給ふか』と獨り自ら泣き群衆悉く罵り嘲つたのと比するに於て如何に兩者の人格及感化力が相異

エルサレムの昇天と東勝寺の墳墓
するかといふことを容易且つ明瞭に知る事が出来るのである。

五、エルサレムの昇天と東勝寺の墳墓

地震ひ岩裂け墓開く……死者復活して墓より出で去る……弟子の目前に昇天す……何故に墓開けたるか……人の子の肉は土に歸したり……靈に於て永遠に生きよ

耶蘇が息絶へた時、地は震ひ、岩は裂け、墓は開けた。猶太人等は磔殺した屍體を其宵の内に十字架から取り去らなければならぬので、兵卒等は二人の強盜の脛を折つて其苦悶を終らせ、次に耶蘇を検した所が、既に死して居たから、一兵卒は鎗を以て其

肋を刺した。此時耶蘇の信者にアリマタのヨセフといふ者とニコデモと云ふ者があつたが、ヨセフは自分の爲めに岩を截つて新らしい墓を築いてあつたから、ピラトの許へ行つて耶蘇の屍體を請ひ受け自分の新らしい墓へ葬りたいと願つた。ピラトは之を許したから、ニコデモも手傳つて師の屍體を十字架から下し、麻布を以て包み、ヨセフの墳墓に葬り、門口を重い石で鎖し、弟子等は別を惜しんで立去つたのである。然るに三日目の朝になると、耶蘇の靈は再び歸つて来て、自身墳墓から出て行つて仕舞つたものである。此時まで番兵が附いて居たが、彼等は之を見るや唯戦ひ慄ひて死人の如くなり、正氣づいてから漸く市に行き、之を報告したので、祭司は驚愕措く所を知らなかつた。

エルサレムの昇天と東勝寺の墳墓

此風評が傳はると弟子等も大に驚いたが、丁度其日の晚餐を共にしやうとエルサレムに集まつた弟子等の前に耶蘇が現はれたので、彼等は大に恐れた。そこで耶蘇は「汝等何で駭くか何で心に疑を起すか、我手足を見て我なることを知れ、我を撫で見よ、靈には骨と肉とはない、併し汝等が見るが如く全く我である」と言ひながら、十字架に釘けられた釘の痕のある手と足を示したが、彼等はまだ信じなかつたので、耶蘇は更に「此所に食物があるか」と言つて、炙つた魚肉を取つて食べて見せたので、彼等の疑は轉じて喜びとまつた。其後耶蘇は四十日間種々なる折に弟子等に見えたが、終にエルサレムの郊外橄欖山に弟子等を伴ひ、其目前で昇天して仕舞つた。ヨハネ傳などは此

復活が神の子たるを證するものであると云つて最も重きを置いて居る説である。耶蘇の奇蹟の甚だ疑はしいのは前にも述べたから、茲には多く言ふまい。併し一言其矛盾に就て述べる。とすれば、耶蘇が息絶へた時、地震ひ墓が開けたのは、神が其所に耶蘇の肉を葬るつもりであつたらう。然るにヨセフの墓へ葬むるに至つたのは、神の力が足りなかつた。又神が墓を開いて肉を葬らせやうとしたのに、靈も肉も昇天して仕舞つたのは、神の意に反したものであると言はねばならぬ。で此復活と昇天とに就ては他に議論もあるが、今は單に以上に止めて、讀者の判断に任せることとする。

次に宗吾は如何かと思つて見ると、之は頗る平凡で何の奇もない。

エルサレムの昇天と東勝寺の墳墓

一三

處刑が終ると、子供四人の屍骸は公津村東勝寺の請によつて下
 渡し、又宗吾の屍骸は三日間曝す筈であつたが、其日の夕方宗吾
 の妹二人と領民總代との願によつて下渡したので、東勝寺境内
 今の靈堂のある側に葬り、諡して宗吾を道閑信士宗平を道了
 おとくを道明おほうを道安おとちを明露と云つた。又宗吾の
 居宅並に宅地八畝二十一歩改正反別七畝十二歩竹林三反五畝
 三步田畑山林合せて石高二十二石餘は凡て没收され、雜具は二
 人の妹に下げ渡された。妹の内一人は常州信太郎波賀村次右
 衛門の妻となり、一人は同國河内郡小野村藤五郎の妻となつて
 居た。で没收された土地以外他村に二ヶ所の山林を所有して
 居たが、之は次右衛門の計ひで回向料として東勝寺へ寄附した

エルサレム昇天と東勝寺の墳墓

一三

のである。刑を免れた宗吾の妻は墨染の袖に行ひ澄まして浮
 世を外に只管夫や子の冥福を祈つて居たが、寛文十九年に此世
 を去つた。諡を妙閑信女と云ふ。斯様に宗吾は其子等と共に
 屍體を東勝寺の墓地に葬られて、人死すれば其肉は地に歸する
 ことを何の飾りもなく示して居るが、耶穌に至つては靈肉共に
 昇天して仕舞つた。茲に兩者に大なる相異を見るのである。
 吾人は靈肉共に昇天するといふ如き普通認識し得べからざる
 事を希望するよりも、目前に常に見る事實により其肉は地に委
 して分解するとも、靈に於て永遠に生きるべく宗吾に學ぶ所な
 くてはならぬのを痛切に感ずるのである。

第四章 教義と示現

一、基督教の母教

舊約全書は天啓靈示の神書……モーセの律法は神命の規矩……疑はしき内所證の實驗……紛々たる諸説……一珍説

耶蘇は神の子である。故に其天啓靈示によつて新に一大宗教を創めたのであらうと思つては大間違である。基督教には母教がある。耶蘇は舊來猶太國民の間に信仰されて居た宗教に或新説を加へたに過ぎないのである。猶太國民は古來信仰心頗る深く舊約全書は天啓靈示の神書であるとし國民が適

從の歸地處世の法規たるものは此外に無いとして信受尊敬せられて居たのである。耶蘇は實に此國民の宗教的精神の中に生れ此舊約經典の宗教的教訓に養はれて一般猶太國民と同じく父祖傳來の宗教を深く信じて居た。故にヨルダン河畔斷食の後起つて布教に従事するに至つても矢張古來の猶太教の根本義を立脚の基礎としたのである。其主たる點に就て見るも神を以て宇宙間唯一とし、モーセの律法を以て神命の規矩とし、メシヤ的新天地に關する古預言者の世界觀を認め、其他靈の不滅來世受報の思想舊約全書を神出の靈典とする信仰等、一として舊約的ならざるはないのである。即ち耶蘇は舊約の經典を立教の基礎とし之に自己獨創の新要素を加へたのである。其

新要素は耶蘇が獨得の靈質による所謂内所證の實驗であるとの事だ。内所證の實驗とは、耶蘇が自ら神と我とは一體で永久に離れぬものだといふ宗教的意識と之に伴ふ活動不滅の靈的生命である。併し此内所證の實驗は古來の猶太教に更に其美を加へたもので、毫も其本質を害しないのであるから、舊約は一層其光を放つものとして猶太人等の歸依を見るべきであつたらうに、却つて事の反對に出たのは其内所證の實驗に疑なき能はざる所である。殊に耶蘇が起つて僅かに三年に過ぎず、新約全書は耶蘇死後久しきを経て作られたものである以上、内所證の實驗の如きも該書編成と同時に生れたものではないかと思はれる點がないでもない。要するに耶蘇自身の布教時代

に如何程の新説があつたかは不明であるが、舊約全書を基礎としたものであることは、今も尙ほ之を新約全書と共に所依の經典として居るに徴しても明かな所である。新約全書の完成した時代に就ては、緒言の内に述べて置いたが、一方にはまた四福音書共に紀元後第三世紀の頃作られたものだとの説もある。又一方には基督教は猶太希臘羅馬等諸國の傳説を緯とし、印度東來の佛教を經とし、燦然たる宗教の錦繡を織り出したものであつて、其内に非佛教的性質を具へて居る觀のあるのは、之を外國に移植するに當つて其地味と氣候とに適合せしめんが爲め、故らに變形したに過ぎない。猶太地方には耶蘇教開基以前に佛教宣教師が熱心傳道的活動を試みた形

跡があるとか、或は耶蘇は夙に佛敎の敎を知り其徒に就て佛敎を學得した人であるから、其敎義中自然に佛敎的臭味を帯びて居るとか、種々なる説もあるが、基督敎學者は、パレスタインの邊邑に育つた、智識の低い賤しい一木工の子が外國の宗教や哲學を學ぶといふやうなことは想像されぬと否定して居る。そして其敎義の外觀に於て部分的の暗合はありとするも、其内容の根本に於て背驅矛盾して居るから、福音書中所載の記事は斷じて佛敎傳説を剽竊したものでないと辨じ、兩者の間に種々なる説もあるが、茲には必要がないから掲げない。唯一つ全然根據の異なる説は、耶蘇は十二歳から三十歳までエッシン教徒に從つて其學を講究した。該教徒はナザレの近傍に住み共同の

生活を營んで居た。其敎義は婆羅門敎に似て居た。世人が耶蘇は幼時佛敎を學んだといふのは、之が爲めであらうと云つて居る。此説が果して當れるか否かも固より不明である。斯様に諸説紛々として居るから佛敎と基督敎との關係に就ては輕々に斷定は出来ぬが、猶太敎を基礎として基督敎が立つた事は多言を要しないのである。

二、基督教の要義

組成せる敎理なし……愛は其第一義……主の祈禱
……耶蘇が人世に持ち來れる最大の幸福

耶蘇は舊約全書を基礎として一新宗教を開基したが、其敎義に就ては別に組成した敎理といふやうなものを遺すに至らな

かつた。是に就て基督教學者は、『心を以て神と一致したのを自覚する宗敎だから文字を以て組成すべき敎理でない』と説いて居る。で強て其根本義を尋ねるとすれば馬太傳二十三章中の『心を盡し、精神を盡し、意を盡し、主なる爾の神を愛すべし、これ第一にして大なる誠なり。第二も亦これに同じ己れの如く爾の隣を愛す可し』とあるのが、即ち基督教の二大綱領であつて、彼の所謂主の祈禱は此義を説明する者である。即ち『天に在す我等の父よ願はくば爾名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成る如く地にも成らせ給へ、我儕の日用の糧を今日も與へ給へ、我儕に罪を犯す者を我ゆるす如く、我儕の罪をも免したまへ、我儕を試探に遇はせず惡より拯ひ出だしたまへ、』

國と榮と權とは爾の窮なく有たまふ所なりアーメン』とあるがそれで、此祈禱中特に免罪と救拯の思想は耶蘇が人世に持ち來つた最大無上の幸福であると言つて居る。其果して然るか否かに就ては議論があるが、それは次節以下に於て述べる事とする。

三、愛は基督教の特有に非らず

善美なる基督教の綱領……教祖言行の矛盾を奈何……耶蘇の愛は無價値

前節に掲げた基督教の綱領は實に立派なものである。併し之は果して耶蘇の眞意を寫したものであるか否かは疑問である。耶蘇は文字に表はした敎理を遺さず馬太傳はマタイ外數

愛は基督教の特有に非ず

愛は基督教の特有に非ず

名の筆者の手になつたものとするれば、其所に何等か誤傳乃至修飾の跡がないとは言はれない。他の福音書亦然り。新約全書を以て神來の靈典とし、奴隸が嚴主に服従するが如く、戦々兢兢として唯之を讀誦して能事畢れりとするならば知らず少しく考察の自由を有つて見るならば幾多の矛盾を其内に發見するのは甚だ難からざる所である。前にも記した無花果の例の如き、耶穌に愛の缺けて居たことを明に證するものであつて、他面に無量の愛を説くが如きは矛盾も甚だしいものと言はなくてはならぬ。其他弟子のユダが三十金の爲めに買はれて背き去るといふが如き、耶穌の愛が僅か三十金の價値にも及ばなかつたことを示すものであつて、口に説いた愛が如何に善美を盡

愛は基督教の特有に非ず

し且無量無邊であつたとしても、それは偽善であるとの一語を以て蔽ひ盡すことが出来るのである。耶穌の愛は斯くの如く無價値のものとして考察出来るが、其開基以來幾變遷を以て今日に至れる基督教は、眞善の愛の宣傳に力めて、前節所掲の綱領を發揮して居ることであらうと思ふ。併しながら其眞善の愛なるもの、必ずしも基督教特有のものでない事を忘れてはならぬ。就中我國の如き、他を愛するといふ美しい情は古來上一一般の通有性たるが如き觀があつたが、西洋文明渡來後却つて其衰ふるに至つたのは争ふ可からざる事實で、痛歎を禁じ得ない所である。我國民性に就ては更めて後章に述べることとする。

四、宗吾の愛の發現

領民救助は宗吾の愛の一端のみ……無限の愛は其元氣生命……至言と德行とは燦として輝く……我國民の幸福は耶蘇と没交渉……我田引水の妄説

宗吾も耶蘇と同様文字に書き現はして組成した所の教は遺さなかつた。けれども其實現した言行凡てか無量無邊の愛であつた。世人の多くは宗吾の愛の全部は領民を救つた點にあるかの如く觀て居るのは大なる誤であつて、宗吾の大精神の上から見れば領民を救つた事などは實に其一端に過ぎないのである。之は決して獨斷誇張を以て言ふのではなく、確實なる事實に基いて言ふのであつて前にも記した十字架上の宗吾の

一言は充分に之を證して餘ある所である。即ち死生を超越した永遠の生命に於て其無量無邊の愛の及ばざる所なきを示したのであるが、彼は耶蘇の如く單に言語を以て之を述べて其行の及ばないやうな醜體はなく、其實際の生活を以て無限の愛は實に彼が元氣生命である事を發現證示したのである。

宗吾は實に愛の一字を以て始終を貫いた。之を彼の耶蘇が「神は人格的慈愛の實體本源であつて、至らざるなき愛を以て人類を統治し、又能く靈の感化を以て人類を善導するものである」と口には唱へながらも、上來屢々述べたる如く幾多の矛盾を示して居るのと比較する時に於て、言行一致毫も矛盾なき宗吾の生涯の如何に偉大に、如何に高尚なるかを見るのである。

宗吾は赫々日月をも貫くべき正義を以て人を導き、慈満ち善溢るゝ愛を以て人を救つたのであつて、其至言と徳行とは、燦然として何人も拒む能はざる光輝を發して居るのである。彼の「神愛は大聖耶蘇の人格を通じて吾人々類に照臨して來たものである」といふ説などは、耶蘇以外には愛を知るものなきかの如き餘りに獨斷に過ぐる語辭と言はなくてはならぬ。現在歐洲各國の如く建國の新らしくて神話や傳説を有たない國民は、滅びたる猶太人の傳説を借りなくてはならぬ必要があるかも知れぬが、耶蘇の出生より遙に以前なる國初以來限りなき神の榮光に浴して人は皆愛を以て結合し、國體の美なる其基礎の鞏固なる、宇内に其比を見ざる神國に生を享けたる我國民の血管に

は祖先以來の愛の血汐は滾々として流れて盡くるの時はなく、其正義を尙び他を愛することに於て、毫も耶蘇の出現と否とに關しない、全く我國民の幸福と猶太人乃至耶蘇とは没交渉であつた。没交渉であつたが故に、我國の神を敬し祖先を尊び、以て萬邦比類なき國體の美を維持して今日に至り、世界に誇ることを得るのである。然るを基督教に於ては「神愛は獨り耶蘇の人格を通じて人類に照臨した」とか、或は使徒行傳四章十二節のペテロの所謂「此ほか別に救ある事なし、蓋天下の人の中に我儕の依頼て救はるべき他の名を賜ざればなり」など、言つて居るのは、其獨斷、我田引水の甚だしき事寧ろ噴飯に堪へないのである。要するに宗吾の愛の實現の如きは、我國民性を高調

した好適例であつて、其崇高なる人格の遙に耶蘇以上である事は上來述べた所によつて、明瞭であらうと信する所である。

五、耶蘇の神人交感と宗吾の人間力

全智全能の神……常人よりも下劣なる人格……斷
食場裡拈出の産物……大人格の裡自ら神人交感あり……宗吾靈神……堀田家の没落

基督教の説によると、神は全智にしてよく世界の目的を定め、全能にして能く人類の沈淪を救ふ。耶蘇は神の子であつて、此全智全能と一致の靈交があるから、神の愛は耶蘇の人格を通じて人類に照臨する。即ち耶蘇の人格は神の愛の活證であるとして居る。此説に於て若し耶蘇の人格が神の子とも云ひ得

べき程に善美なものであるならば別に非難すべき事はないが、耶蘇の人格は斯くの如き圓滿至上の域に到達するには餘りに距離が遠かつた。自己の飢を凌ぐの用に供し能はざりしが故に神の生成せしめし無花果を枯らすの残忍を敢てし、弟子を愛すること足らずして背き去られ、死に臨み捨て給ふかと神を怨むが如き語を發する等、吾人日本人を以て見れば常人の人格と雖も、尙ほ且つ斯くの如きは下劣とする況んや神の子たるに於てをや。其神人交感の如き如何に巧妙なる語を以て粉飾するとも、新約全書の抹殺せられざる限りは到底肯定する能はざる所である。然らば彼は神と自己との靈交あるなどいふ事を何所から持ち出したか。或は眞に聖靈によつて孕める神の子た

耶蘇の神人交感と宗吾の人間力

るが故か否其信す可からざるは前に詳論した。恐らくはヨル
 ダン河畔の斷食場裡に拈出し來つた所の産物であらう。
 斷食は釋迦もマホメットも行つた。回教徒の如きは今でも
 盛んに行つて居るとの事である。我國でも古來技藝上達或は
 病氣平癒等祈願の爲め斷食するの習があつて成田山の斷食堂
 の如き今でも人の絶える事がない相である。或斷食實驗者の
 説によると最初の三四日は飢渴に苦しむが其後精神は極めて
 安靜となり現在識即雜念は去つて潜在識ともいふべき一種靈
 妙な感が起る。従つて精神統一には非常に効があり信仰心な
 ども大に加はると云つて居る。又或人は長期に亘る幾回かの
 斷食によつて偉大な靈力を感得し如何なる病症と雖も治癒せ

耶蘇の神人交感と宗吾の人間力

しむる事が出來ると稱して居る。著者は果して此の如き治療
 法が効果を奏するものであるか否かを實驗せんが爲め其人の
 施術を受けて見た。普通施術と同時に感應があり輕症一週間
 位で治療するとの術者の言であつたが著者は最初から何の感
 じもなかつた。併し何等かの効果を見る事が出來るものか
 如何かを確かめようと勉めて二週間の施術を受けた結果は斷じ
 て其靈力の効果のないといふ事と其術者の信仰心の甚だ強い
 事とだけを充分に認めたのであつた。耶蘇も此例で斷食中に
 まづ猶太王たらんとする前提として自ら神の子たる思想を堅
 めて仕舞つたのであるまいか。至る所に靈力を發揮して奇
 蹟を行つて歩いた事などは著者の實驗した靈力家と頗る似た

耶蘇の神人交感と宗吾の人間力

所あるの感に堪えぬのである。
ひらがへつ 翻て宗吾を見るに、普通人たる彼は決して神人交感も説かず奇蹟も示さない。併し其死生を超越して永遠の生命を認め正義と愛とを以て汚れたる世を救つた大人格の裡に、神人交感を示して居る。即ち耶蘇は口に之を唱へて行ふ所は之に反し、宗吾は無言にして却つて其實を示したのである。此事たる頗る妙味の存する所で、宗吾は單に人として最善の事を爲さんと力めて此域に達し、耶蘇は自ら高くせんとして徒らに聲を大にしたが、行^{おこなひ}之に及ばなかつたのである。此比較に於て吾人は濫りに神人交感などを口にするよりも、宗吾の如く各人が完全に人間力を發揮すべく努力するに於て、人類の幸福は益増進

耶蘇の神人交感と宗吾の人間力

するであらうと信するのである。
 宗吾の人間力の偉大なことに就ては、上來述べた所によつて判明して居ると信するから、爰には唯其死後に於ける堀田家との關係に就て少しく記さう。宗吾上訴後、正信は藩政民治其任を失したる故を以て老中職を免せられ、宗吾刑死後、正信の夫人は間もなく病死したので、正信は日夜良心の苛責に堪へ兼ね、宗吾の血屬を搜索して傍親理兵衛の二男利右衛門をして宗吾の家系を相續せしめたが、尙ほ心が安まらず、處刑の翌承應三年十一月、宗吾の靈を祀り寶珠院を別當として口宮明神と稱した。而かも元來が惡人ならぬ正信のことであるから、益々良心の苛責に堪へ兼ね、一時狂氣の狀を呈したが、遂に萬治三年其所領を

耶蘇の神人交感と宗吾の人間力
 一箇
 没收され、奸臣等は主を失つて、悉く佐倉を退散し、正信は信州飯田脇坂家に幽閉せられ、後若狭國酒井家へ移されたが、潜かに若狭を出て京に上つた故を以て、淡路松平邸に幽閉された。斯くて正信は前非を悔ゆるの餘り、遂に延寶八年淡路の幽居で屠腹して此世を去つたのである。一方佐倉領民は領主の代ると同時に幕府から救米として高一石に付二割を免するの命があつたので、益々宗吾の偉徳を尊崇し、一詞を建立して宗吾靈神と稱し、春秋二季に祭典の禮を擧げ、其後實曆二年百回忌を營むに當つて法號を涼風道閑居士と改めた。又享和二年百五十回の法會を執行するに當つて領主堀田侯正信は城地を沒收されたが、正信の弟で春日局の養子となつた正俊は上野安中城主と

なり、其後山形に封を移され、七十八年を経て正俊の後、正亮に至り、山形から佐倉へ移された。即ち正盛の裔ではあるが、正信の後では、ないから、徳滿院の尊號を追贈し、靈堂の左側に一碑を建立し、徳滿院涼風道閑居士の法諡を捧げて、大に其靈を弔慰し、後四年を経て文化三年に至り、玄孫利右衛門の貧困に陥つたのを聞て、召出し、五石面の土地を下賜して、其子孫を優遇した。斯くて藩主は宗吾の意志を尊重して、徳政を布き、領民は擊攘鼓腹の民と化して、益々宗吾の恩澤を感謝し、今に至つて救世者として尊崇措かないのである。之れ宗吾の偉大なる人間力の反映であつて、地位や智識の如何を問はず、人間として最善の力を盡し、至誠を以て一貫する時に於て、其所に永遠の生命の生ずること

耶蘇の神人交感と宗吾の人間力

二者の性格
を語るものである。

第五章 性格と道徳

一、二者の性格

古往今來唯一の人格者……唾棄すべき下劣人物；
……糞土に被せし燦然たる法衣……正義と愛との
結晶……純潔無垢なる清淨心より發する人格の光

基督教徒は口を開けば吾人々類の道念と品性との先達模範として尊重敬服すべき者古往今來唯一人の耶穌基督あるのみと説く。そして耶穌の性格を以て絶大無量の愛の結晶たるかの如くに信じて居る。併しながら耶穌の性格は斯くの如く善

二者の性格

美のものと認むる能はざる事實を其唯一の經典たる新約全書中に暴露して居るのは遺憾の至りである。

我國では古來謙遜を美德として居る。猶太には此風がないものかは知らぬが彼は自ら高くせんが爲めに神の子と誇稱した。自ら品性を高めるべく力めることは善い事ではあるが其徳性の足らずして濫りに神の子と自稱し衆人の上に立たんとするが如きは傍若無人も甚だしいものである。殊に彼は猶太の王であるとも僭稱した。斯くの如きは大野心家に非ずんば誇大妄想狂とも云ふべきものであつて其性格の甚だ卑しむべきものたりしは言ふまでもないことである。彼に取るべきは唯愛の一點であるが之さへ衷心湧出して來るものではなく野

心を充たすべき方便に過ぎない事は、上來屢々述べたる如く、其力の甚だ薄弱なりし點及び幾多の矛盾が、明に證して居るのであるから、更めて爰に之を贅する迄もない。要するに從來熱心なる信徒が其教とする所に隨喜するの餘り、燦然目を眩すべし法衣を祖師の身邊に着せ被けるのであるが、祖師本來の面目は茲にあらわりしが故に、意外の方面に於ける成功に啞然として、私に苦笑を禁じ得ないものであらうと思はれるのである。之に對する宗吾の性格は如何であるかと見るに、宗吾こそ眞に正義と愛との結晶であつた事は、既に上來記した所によつて了解された事と信するが、尙ほ一言して置きたいのは、彼が愛と正義とを基礎とせる自覺意識、即ち至誠の信念の牢固として、拔

くべからざるものを有つて居た事である。神の寵を専らにして居ると自稱した耶蘇さへも、其死に臨んでは、天國に生れるのを喜ぶべき筈であつたにも拘らず、却つて神よ捨て給ふかと悲しい聲を絞つて居る。然るに宗吾に至つては、人間の最大悲哀たる死の谷底に沈落せる時、殊に四子の無残なる刑死を目前に見ながら、尙ほ自若として、正邪は神明の知らし召す所であると云つて、毫も自己の犠牲を意とせず、最も親切なる愛を以て他を永遠に救はんこと期して居た。之實に宗吾が純潔無垢なる清淨心より發する人格の光であつて、彼の野心遂行の方便なる偽善等と、日を同ふして談すべきものでない事を斷言するに憚らぬのである。

二者所望の最大幸福

一七

二、二者所望の最大幸福

我曹の主は生ける也……矛盾せる奇現象……生死を超越せる大安心……最後の哀音は野心に發す……現世的と超世的

基督教では『我曹の主は死したるに非ず生ける也』といふ信仰と『死も遂に神人合一の靈的實驗を破ることは出来ぬ』といふ意識とを有つて居る。之は耶蘇の復活と神人交感から出發したものであつて、其結論として『神人永劫の一致から生ずる圓滿無上の大安心』を最大の幸福として居る。此教義は立派なもので、基督教徒の多くが之によつて安心を得つゝあるは事實であらう。併しながら祖師たる耶蘇其人が此大安心地

二者所望の最大幸福

一七

に達して居なかつたのは頗る奇現象と言はなければならぬ。之は多く辯ずるまでもなく、其死に臨んで發せる哀音『神よ捨て給ふか』の一語が最も雄辯に證明して居るのである。翻て宗吾は如何と見るに、彼は正義と愛とを以て心に満たす時、其所に無上の幸福があると信じて居た。故に十字架の上の最後に臨むも『正邪は神明の知るあり』て大安心を以て自若として刑に就くことが出来たのである。耶蘇が現在肉身死滅の後移住すべき新世界、即天國は幸福の快樂の度を一層高ふするものであると口には唱へながらも、愈現世を去るべき利那に至つては、苦痛の哀音を禁じ得なかつたのに比し、却つて宗吾に此大安心のあつた所以のものは、愛と正義とを以て一貫す

二者所望の最大幸福

る永遠の究竟地には必ずや無上の大安心、即無上の幸福あることを最も明確に吾人に教へるものではあるまいか。彼の耶蘇をして最後の哀音を發せしめたものは其野心である。彼は地上に王者としての現世的幸福を得ん事を希望し、其王國建設の手段として宗教的結合の捷徑なるを信じ、卒然起つて布教に従事するに至れるものであるから、一朝其志の齟齬して方便として唱へたる天國に赴かざるべく餘義なくされるに方ては現世に執着を遺して苦惱の聲を發したのは當然の事である。斯くして其方便のみは使徒によつて保存傳播され、漸次に現今の美果を見るに至つたものであるからには、現に基督教の幸福とする所を以て直に祖師たる耶蘇の幸福とした所と解するは

一五

當らざるものと言はなければならぬ。要するに耶蘇の所望した幸福は其語に反して現世的であり、宗吾は却つて超世的であつて、耶蘇は之を得ずして失望して逝き、宗吾は之を得て大安心を以て現世を去つた。而して此相異たる眞善と偽善との因果關係を明かにしたものに他ならぬのである。

三、基督教と道德

歐米道德の本源……幾つもある眞理……基督教國に滅亡なきや……暴落されたる基督教國の腐敗……罪惡觀……反省を知らざる神の子……報酬を望む德行……彼等の僥倖は耶蘇の教ふる所也

歐米各國の道德思想が基督教の教義から出發して居るのは

基督教と道德

一五

事實である。故に彼等は之を以て無上の教義とし「世界人類の全體に向つて眞正の福祉を與ふる者は獨り基督教あるのみである。その教義の本源から流れ出る道徳的感化は個人若しくは團體の生活上重大顯著なる結果を生じ有形無形の社會的進歩に原動誘引の勢力たるものである」と説いて居る。之は基督教國に於ては當然と認める所かは知らぬが、其教外のものから見る時には餘りに我田引水の甚だしいのに驚かざるを得ない。若し彼等の説にして眞なりとせば基督教國に罪惡なく争闘なくまた亡ぶるものもなく唯一眞理を奉じて幾多教派の分裂を見るべき道理もない。然るに事實は全く之に反し教派は無數に分れて各主張を異にし罪惡は到る所に行はれ争闘は

殊に甚だしく異教徒に對する迫害征服は言ふまでもなく基督教國間乃至基督教内部に於てさへ争闘が烈しかつた。内にも希臘教が羅馬から分離するには二百年も經た、そして基督教を歐洲各國に扶植するに最も力あつて神の恩寵を専らにすべかりし強大なる東西羅馬帝國さへ其末路は悲惨を極めたものであつた。次では歐洲の二強國を以て誇つた西班牙葡萄牙も今は半亡國にして僅に其餘喘を保つに過ぎぬ。現在歐洲強國が基督教國たるの故を以て基督教國に非ずんば國運の隆昌を期し難いものゝ如く思惟するは歴史を無視するもので謬見も亦甚しいと云ふべきである。國初以來曾て外邦の侮を受けず、赫々として宇内に輝きつゝある我帝國の如き、斷じて基督教

の恩恵に浴したるの結果でない。其秩序の整然として道徳の
 發達して居た事に對し基督教國は之を何と評するであらう。
 殊に基督教國の殆んど全部とも云ふべき歐洲各國現在の状態
 は如何である。神朕と共に在すと稱する獨逸皇帝も希臘正教
 教主たる露國皇帝も乃至神の祝福を受けて王冠を戴ける各國
 王も、悉く敵を愛せよとの本義を忘れて、砲烟彈雨の間に彼等
 が言ふ所の惡魔の相を自ら現じつゝあるではないか。最近ま
 た博愛主義を表榜せる北米合衆國が起つて、メキシコに兵を加
 へるに至つた。暴露されたる基督教國の道徳的腐敗は實に此
 戦争のみでない。我國の如き科學文明に於てこそ歐米諸國に
 後れたれ、其道徳思想の如き遙に立派なものを有つて居たので

ある。然るにも拘らず彼等が異教國を蔑視し耶蘇教國のみ高
 しとして(獨逸の黃禍論米國の邦人排斥を始め其例は甚だ多い)
 倨傲を極むるは、自ら其道徳の低きを示すものであつて、祖師た
 る耶蘇が賤しい木工の子を以て神の子と僞稱し、猶太王と僭稱
 して憚らなかつた不遜の態度を其儘に現はして居るのに他な
 らぬ。
 併し既に世界的大宗教たる基督教のことであるから、これか
 ら流れ出た道徳に幾多の美點があり、又それが弘く行はれて居
 るのも事實である。此美點中最も著しいものは其罪惡觀と
 慈愛の思想であらう。其教義によると「罪とは神の意思と人
 間の慾望との衝突である。詳言すれば自己を以て生活の中心

としやうと欲する利己的動機に動かされた慾望が、至正至善なる神の道徳法に觸れて起るものである。故に人の心中に利己的我慾が決定される時、罪は忽ち現はれるもので、罪の結果は直に禍を生じ、少なくとも良心の刺撃から来る苦悶懊惱の伴ふものである。若し過つて一罪を犯したならば、且つ悔ひ、且つ恥ぢて自ら責めなくてはならぬ」と説いて居る。之は實に立派な思想であるが、必ずしも耶蘇教特有のものでない。我國の如き神代の昔から罪や汚れを穢ふの方法が行はれた。即ち心を清淨にして神の心と齊しくするのである。儒佛傳來後には罪惡觀も大分複雑にはなつたが、常に自己を省みて、過を改め善に移らねばならぬといふ思想は一般に有つて居た。高尚なる思

想を有つた人の事は暫く措くとするも、目に一丁字のない田夫野郎さへ尙ほ且つ「過つて改むるに憚ることなかれ」「人の振り見て我振り直せ」「我身をつめて人の痛さを知れ」などと言ふ類の鄙近な諺を口にして、反省及び離惡移善の道を充分解して居たのである。耶蘇がピラトの前に自己を省みることなく、他者の罪を數へたなどは、我田夫野郎にも劣れる卑しむべき思想を有つて居たといはねばならぬ。次に耶蘇教の慈善博愛等の事業は、實に隆盛を極めて甚だ感嘆すべきものが多いが、愛が必ずしも耶蘇教の特有でないことは既に前に述べたから茲に贅するまでもないことである。

斯く見來れば耶蘇教より流れ出た所の諸徳は必ずしも我國

古來の道徳に勝つて居るとは言はれない。假令又耶蘇教の諸徳を善美なものとするとも未だ以て道徳上の眞價値を有するものと認められることは出来ない。何となれば彼等の徳行の目的は、一に神からの報酬を期するにあつて、衷心自然に湧出する者でないからである。即ち彼等の道徳は其結果として神の恩寵に預らうとする欲望——生きては神の榮を専らにし死しては天國に生れんことを希望する——の所行である。報酬を望む所に何の道徳か之れあらう。彼等は既に自己の善行を以て神前に價値あるものとし、彼等の外に神は榮光を垂れぬものとして居る。即ち世界に於て最もよく神に親近し、且つ最も多くの慈善を爲す者は彼等たるが故に、神前に人間として價値を有するも

のは彼等の外にないと信じて居る。彼等が自ら居る事極めて尊大に傲慢不遜の眼を以て一切他の教外の人を蔑視し、弱小なる異教國を征服蹂躪して得々たる所以も亦實に此に存するのである。東洋人に對する態度の如きは言ふまでもなく殊に甚だしい例は猶太人に對する虐待迫害である。歐洲人が猶太人に對する恰も動物を見るが如く、決して人間扱をしない。過去幾世紀間を通じて歐洲に行はれた猶太人の虐殺は實に悲惨な亡狀を極めたものである。假令猶太人が耶蘇の刑を求めたにせよ、一面彼等に福音を傳へた神の子を生んだのは猶太人ではないか、神は猶太人に幸福あらしめんとして耶蘇を其國に下したのではないか。之を以て見れば耶蘇教國は猶太人に對し

ては出来得る限り優遇すべき義務がある。然るを事は全く其反對に出で暴戾殘虐至らざるなく殆んど文明人たるの價値を疑はしめるものがある。彼等を以て言はしむれば猶太人は神の子を刑した大罪人と言ふであらうが敵を愛せよの眞意を有するものならば斷じて斯くの如き舉に出るを許さぬのである。假りに百歩を譲つて之を許すとすも其子孫の總てに何の罪がある。國亡びて各國に流寓する猶太人を殆んど奴隸の如く扱ひあらゆる迫害を加へ時あつてか數千人乃至幾百人の大虐殺を行ひ、少人數の殘殺の如きは至る所に行はれて枚舉に遑ない程である。而して今日に於ても尙且猶太人を動物視して平等なる人格を認めないのは何たる亡狀何たる倨傲であらう。

之は僅かに一例を挙げたに過ぎないが斯くても彼等の道徳は善美を極むるものと言ひ得るであらうか。要するに彼等の特質を一言にして表はせば耶蘇教徒以外には價値ある人間なしとする倨傲是れである。而して此倨傲たる其祖師耶蘇が自己の徳品を修養するの工夫を等閑に附し濫りに聲を大にして神の子猶太王と僭稱した所の陋劣なる性格に源を發するものと言はなければならぬ。

四、宗吾の言行と我國民道徳

我國民道徳は大和魂に發す……大和魂は靈の精華也……絶對の和無限の愛……清廉潔白忠勇義烈高雅優美……正氣歌……犧牲的精神……結核菌を飲

宗吾の言行と我國民道徳

宗吾の言行と我國民道徳

む遠視的近視眼者……純潔純粹……將來の世界指
導者……永遠の種

我國民道徳は大和魂(大和心とも云ふ)に發するものである。此大和魂といふことは随分古くから稱へられた言葉である。にも拘らず、其由来や性質を明にせず、唯單に尙武の心位に止まるやうに解して居る人々も少なくない。即ち茲に少しく大和魂に就て説明を試み、我國民道徳の此に發する所以を明にするの必要を認めるのである。

魂とは靈である。靈は精神で心の源である。靈の純粹なる所に氣あり力あつて、其氣力の併發するのを魂の發現といふ。大和魂とは靈の精にして心の華、即ち靈の精華である。

宗吾の言行と我國民道徳

朝日にはふ山櫻花

「やまと」とは大和の二字に相當する語で、其字義の如く大和和することをいふ。即ち大は無限にして絶對の意、和は慈しみであつて愛の義である。故に大和とは愛の無限にして和の絶對なることを意味するのであつて、大海の洋々たる如く愛の満々として和氣の溢れんとするもの之れ、即ち大和魂である。併し大の絶對を意味する内には、儼乎として易ふべからず、確乎として抜くべからず、凜乎として犯すべからざるもの、存するは言ふまでもない事である。即ち此大和魂から我國民道徳は流れ出たものである。本居宣長の

敷島の大和心を人間はば

宗吾の言行と我國民道徳

と詠んだのは、日本人の本性が天真爛漫美しく、潔く明かに
 淡白に、執着なく、恰も朝日の前に咲き匂ふ山櫻の花のやうにバ
 ッとして實に表裏のない、透通るやうな、潔い氣質、即ち清廉潔
 白、忠勇義烈、高雅優美の質を具へて居る事を云ひ表はしたので
 ある。又或神道家は「大は廣くして容る者、和は平にして安
 なる者、故に廣く平にして安く容る者、大和魂である。大
 は圓くして満てる者、和は靜にして謐かなる者、故に圓く靜にし
 て謐み満つる者は大和魂である。大は闊にして包む者、和は
 泰かにして完き者、故に泰然として闊く完全に包む者は大和魂
 である。大は嚴にして寛なる者、和は親しみて睦まじき者、
 故に嚴にして親しく寛にして睦まじき者は大和魂である。

宗吾の言行と我國民道徳

る。大は長くして多き者、和は切みて、寧なる者、故に長く大切
 にして多く丁寧なる者は大和魂である。大は重くして量る
 者、和は仁にして義なる者、故に仁を重んじ義を量るは大和魂
 である。大は精にして偉なる者、和は禮にして智なる者、故に
 禮に精しく、智の偉なる者は大和魂である。大は優しく勝つ
 者、和は正しく、信なる者、故に正ふして優しく、信にして勝つ者
 は大和魂である。大は衆にして雜る者、和は密にして合ふ者、
 故に衆に合ふて密に雜はる者は大和魂である。斯様に大和
 魂は雄大深妙であつて、其範圍の廣汎なる、到底測り知る可か
 らざる底のものである」と説いて居る。
 彼の藤田東湖の正氣歌の如き、また大和魂を詠んだに他な

らぬのである。左に掲げやう。

天地正大氣
 巍々聳千秋
 發爲萬朶櫻
 銳利可斷莖
 神州孰君臨
 明德伴大陽
 乃參大連議
 饒々焚伽籃
 清丸嘗用之
 虜使頭足分
 粹然鐘神洲
 注爲大瀛水
 衆芳難與儔
 蓋臣皆熊羆
 萬古仰天皇
 不世無汚隆
 侃々排瞿曇
 中郎嘗用之
 妖僧肝膽寒
 忽起西海颶
 秀爲不二嶽
 洋々環八洲
 凝爲百鍊鐵
 武夫盡好仇
 皇風洽六合
 正氣時放光
 乃助明主斷
 宗社盤石安
 忽揮龍口劍
 怒濤殲胡氣

志賀月明夜
 又代帝子屯
 或伴櫻井驛
 一身當萬軍
 昇平二百歲
 生四十七人
 長在天地間
 卓立東海濱
 修文興奮武
 邦君身先淪
 孤臣困葛藟
 陽爲鳳輦巡
 或投鎌倉窟
 遺訓何慙歉
 或殉天目山
 斯氣常獲伸
 乃知人雖亡
 凜然叙彝倫
 忠誠尊皇室
 誓欲清胡塵
 頑鈍不知機
 君冤向誰陳
 芳野戰酣日
 憂憤正悵々
 或守伏見城
 幽囚不忘君
 然當其醜屈
 英靈未嘗泯
 敦能扶持之
 孝敬事天人
 一朝天步艱
 罪令及孤臣
 孤子遠憤墓

宗吾の言行と我國民道徳

宗吾の言行と我國民道徳

何以報先親

嗟予雖萬死

生死又何疑

死爲忠義鬼

枉苒二週星

豈忍與汝離

生當雪君冤

極天護皇基

獨有斯氣隨

屈伸付天地

復見張四維

之れ實に大和魂の絶秀絶美なる特質を形容したものであ
る。畏い事ではあるが明治天皇の降し給へる教育勅語も此
大和魂の由來と性質とを明にし給ふたものと拜察せられ
る。大和魂はあらゆる美德を包括したものであるが此美德
を部分的に見ると愛などのやうに外國にあるものも少なくな
い。併し忠孝義勇潔白果斷等は大和魂の有つて居る特質と
云つて差支ないもので外國に比し著しく秀で居ることは

宗吾の言行と我國民道徳

學者の認めて居る所であつて我國ほど忠孝の念の發達した國
は世界の倫理史を繙いて見ても何處にもないことである。
そこで此忠孝義勇等の特質は語を換へて見ると己を捨て、人
の爲めに盡す、即ち己の爲め私利の爲めといふことを顧みずに
道の爲めなら己れを捨て、盡す不義なことは少しも嫌だ
正しい事なら飽くまでもするといふ事になる。で此己を捨て
正義の爲めに盡すの念を犠牲的精神と云ふのである。
犠牲的精神は例へて見ればランプの内の石油の如き者であ
る。ランプが煌々たる光を放つ間に石油は消滅する。即ち石
油は自ら消滅して光を放ち暗夜を照すのである。で此犠牲的
精神は場合と目的によつてそれ／＼現はれ方が違ふ。或は